

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Villages and Dwelling Houses in the Torres Strait Region

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 尚次 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004482">https://doi.org/10.15021/00004482</a>

## トレス海峡地域の集落と住居

杉 本 尚 次\*

### Villages and Dwelling Houses in the Torres Strait Region

Hisatsugu SUGIMOTO

The Torres Strait Region, as discussed here, includes the Torres Strait Islands, Daru, on the southeast coast of Papua New Guinea, the coastline opposite Daru, and the Fly River Delta, such as Kiwai Island.

Present-day locations and types of settlements are the first topics surveyed in the paper. Various characteristics of present-day (1975–1979) dwelling houses are examined in comparison with the data obtained by A. C. Haddon and his Cambridge Anthropological Expedition (late 19th century) in order to elucidate stylistic changes. High-elevated houses, Round houses, and Longhouses are compared with those in Southeast Asia and Oceania (particularly Melanesia), focusing on geographical distributions.

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| 1. はじめに              | 4・3 高床式（杭上家屋）と地床式（土間式） |
| 2. トレス海峡地域の集落立地と集落形態 | 4・4 高床式、地床式の分布         |
| 2・1 トレス海峡諸島          | 4・5 円形住居の分布をめぐって       |
| 2・2 パプア・ニューギニア南西岸    | 4・6 間取型と住まいかた          |
| 3. トレス海峡諸島の伝統的住居     | 4・7 付属建物               |
| 3・1 ハッドン調査隊の報告を中心に   | 4・8 ロングハウスをめぐって        |
| 4. トレス海峡地域住居の諸特色     | 5. むすび                 |
| 4・1 建築材料（屋根、壁面を中心に）  |                        |
| 4・2 屋根型              |                        |

### 1. は じ め に

昭和50年度および昭和54年度文部省科学研究補助金による共同調査「西南太平洋島

\* 国立民族学博物館第4研究部

嶼部（トレス海峡）の漁労民の地理学的・民族学的研究」（第1次および第3次調査）に参加する機会を得た。

この調査はアジア大陸と太平洋諸島の接触地域における島嶼民の伝統的漁労文化、漁民社会の研究を通じて、接触地域のもつ文化伝播上の役割を明らかにし、加えて当地域の文化変容の過程を明らかにしようとしている。

第1次調査に関しては、ハモンド島 [杉本 1978: 95-113]、木曜島 [杉本 1977: 1-19] について報告した。第2次調査は1977年に実施されたが、筆者は民博開館のため参加しなかった。

第3次調査ではスー島およびパプア・ニューギニア側のダルー島を中心に調査を進めた。全隊員の調査地域は、トレス海峡諸島の住民の居住する島についてはステューブン島を除いて全島におよび、パプア・ニューギニア側のダルーをはじめ数村落についても分担調査が進められた。

まとめの方向としては、分担地域の地誌作成と項目別による研究の総括が行われた。筆者は集落と住居を分担したのである。

本研究で対象とするトレス海峡地域は、トレス海峡諸島（オーストラリアのクイン

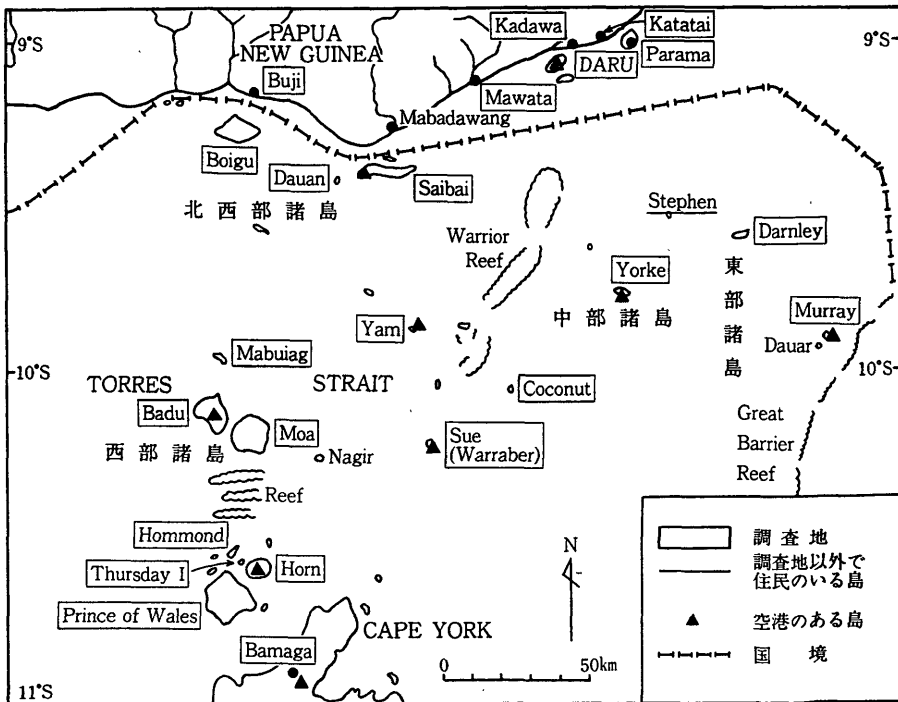


図1 トレス海峡調査地域全図

ズランド州に属する) と、パプア・ニューギニア南西岸のダルーおよび対岸地域、キワイ島などフライ川デルタ地帯をふくんでいる。

まず現在の集落立地と集落の形態を概観する。集落の重要な構成要素である住居については、19世紀末の A. C. Haddon 調査隊の資料と比較しつつ、トレス海峡諸島の住居を展望する。ついで現在のトレス海峡地域における住居の諸特色を構成要素別に考察し、住居様式の変化を追跡する。トレス海峡地域内での比較を行うと共に、構成要素の2、3については、その分布を軸にして、東南アジア、オセアニア（とくにメラネシア）地域との比較を試みる。

## 2. トレス海峡地域の集落立地と集落形態

### 2・1 トレス海峡諸島

トレス海峡諸島の大半の島の村落地区については、調査隊員の分担で簡易測量による1000分ノ1地図を作成している。いくつかの島については詳細な航空写真が完成しており、集落立地や集落形態、屋敷内家屋建物配置などの考察に利用できた。

オーストラリア大陸北端ケープヨーク半島とパプア・ニューギニア南西岸との間に散在するトレス海峡諸島の集落は、人口規模も30～400人と幅があるが、100～200人の集落が多く、一般に小規模な集落が多い。

西部諸島のうち、南部に位置するプリンス・オヴ・ウェールズ島は新しい集落だが北部海岸に列状村をなす。木曜島の場合、トレス海峡諸島の行政・経済の中心でもあり、白人主導型の島である。ポートケネディから丘陵性山地にかけて市街地を形成し

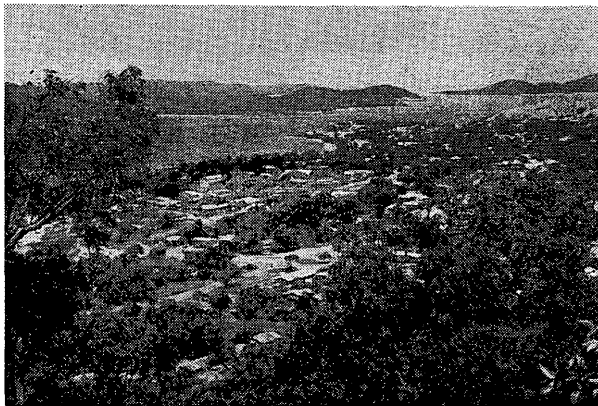


写真1 トレス海峡諸島の行政・経済の中心（木曜島市街地）



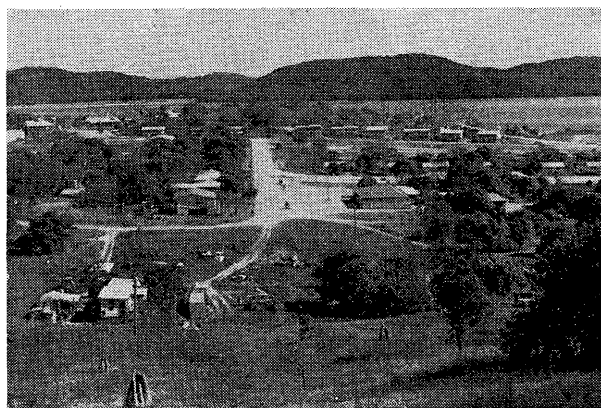


写真2 木曜島タモイ集落

ている。新村落タモイはトレス海峡諸島民を集めた計画的村落で、一種の疎集村形態をとっている。

ハモンド島はカトリック聖心派による教会主導型の村づくりである（1928年）。集落は島の南東部に位置し、海岸部と、やや内陸部の2地区にわかれた疎集村である。小丘の上に石積みの教会があり、神父館、集会所、旧小学校舎、バスケットコートなどが集まって美しく整備され、島民の生活の中心となっている [杉本 1978: 95-113]。

バドゥとモアの2島は山岳島で海峡諸島の中でも面積が大きい。

モア島のセントポールは1917年に英国国教会によってつくられた村であり、列状村の形態をとっている。クビンはモア島南端部の台地上に立地し、やや疎らな集村状（疎集村）をなしている。

マビオグ島は150 m 余の高い丘を頂点とする丘陵性の島で、集落は1920年代に計画的に島内各地から集められた。東部海岸の北半部、丘陵前面の砂堆上に立地し、細長い列状村を呈している。

北西部諸島のサイバイ島は、島の中央部に広い低湿地があり、低平な沖積島である。集落は19世紀末に宣教師の指導で島の北西部の現位置に集められた。低湿地(1.2~1.3 m)と海との間の細長い微高地(2.0~2.6 m)に一線上に立地している。この海岸の狭長な微高地は3カ所で1.5 m 前後の低地がある。瀉を形成する砂州的な地形上に集落が立地している。

ボイグ島も低湿地が多く、集落は北岸の3.6~4.0 m の微高地に立地している。疎集村形態だが、やや列状村に近い形態である。ダウン島は最高296 m の古い火山島で、かなり急斜面が海に迫っている。集落は北東海岸の10 m 以下の狭長な場所に

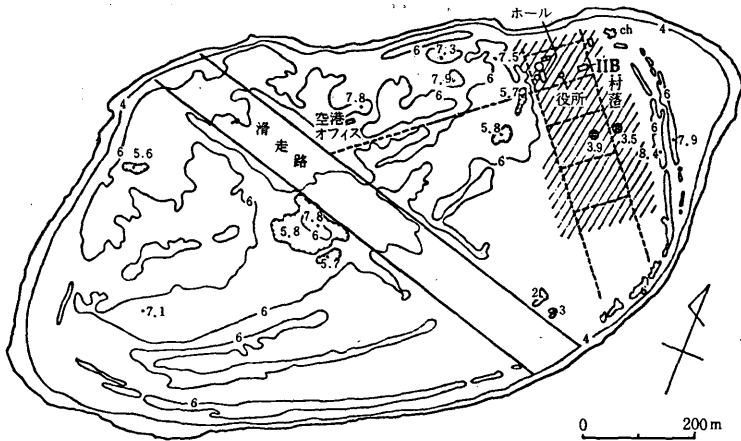


図2 スー島全図

道路沿いに列村状の形態をとっている。

中部諸島のヨーク島は整然とした疎集村形態である。ヤム島は古い火山島だが、西部の小平地に集落が立地し、疎集村形態である。

ココナツ島はサンゴ礁の細長い島で、南側に 8.0~10.0 m の微高地が連なっている (小浜堤)。集落は島の北西部に立地し、疎集村状だが、やや列状に近いタイプである。

スー島は周囲 3.3 km の楕円形のサンゴ礁島である。

村落は島の東部、標高 4~5 m の平坦地に立地している。1956年に作った新しい村で、主要部は 5 m 幅の道路によって整然と区画されているが、道路区画の東側にも民家があり、この部分は僅かに高くなっている (6 m)。村落の北側の海岸近くには、

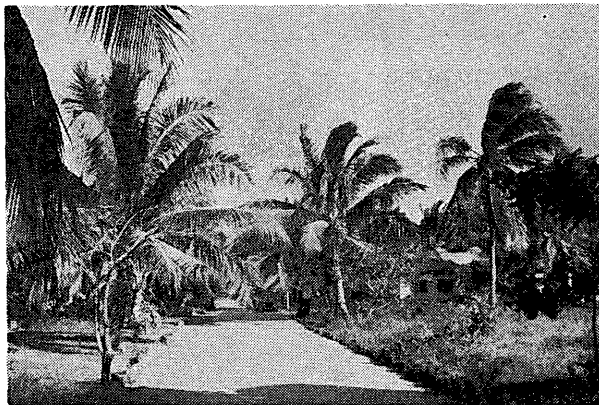


写真3 スー島の集落 (5 m 幅の道路を中心とした整然とした村づくり)

ココヤシの葉で編んだ壁面をもつ伝統的様式を残した教会（英国国教会）、冷凍庫、通信所、診療所があり、少し村から離れた海岸に亀の養殖場がある。北寄りの1区画には公会堂、大天水タンク2基、倉庫兼車庫、役場、I・I・B (Island Industries Board) のスー島支店が集まっている。小学校と幼稚園は村落の南寄りにあり、村長宅は南端に位置している。

井戸は村落のほぼ中央部に2カ所あり、揚水タンクが村落景観に特色を加える。天水のみにたよるココナツ島に比べて飲料水には恵まれているが、洗濯その他は天水を

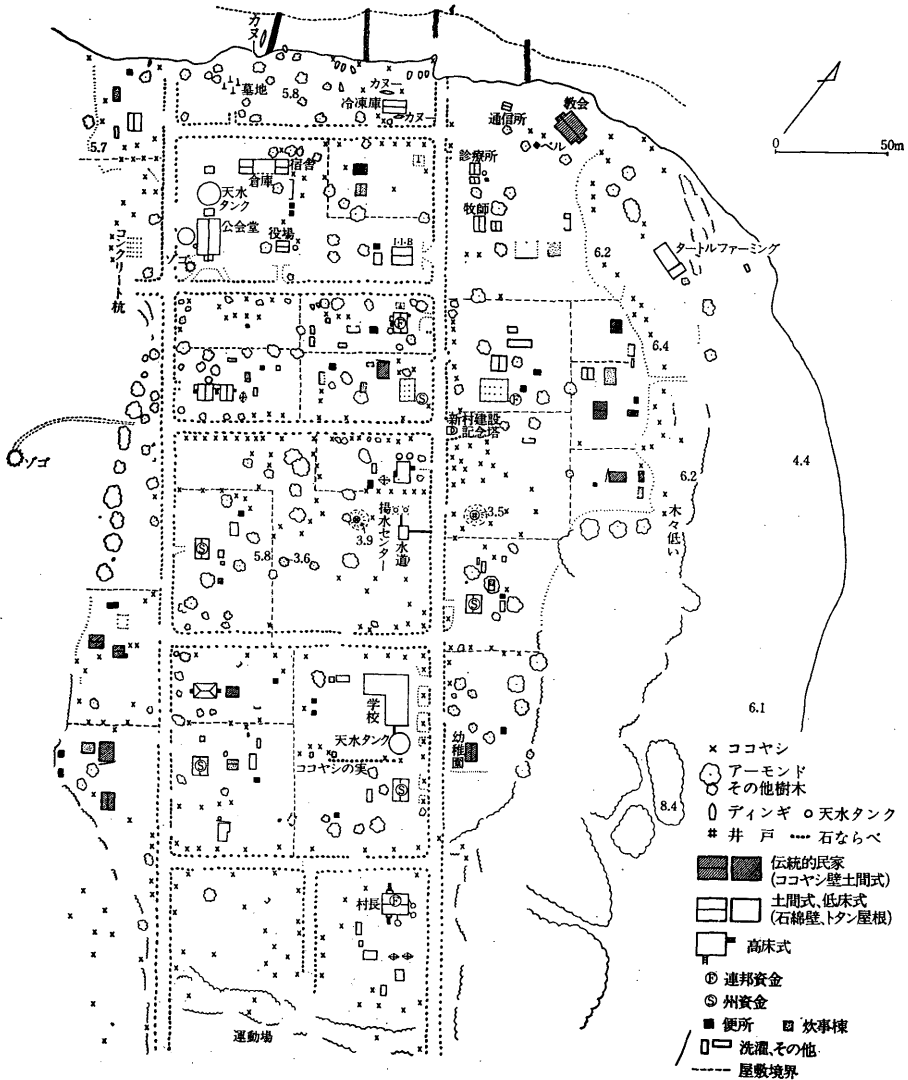


図3 スー島村落図

利用している。島の中央部滑走路脇と南端近くに小凹所があるが、その中に旧井戸がふくまれている。

村落の東・南側は微高地（最高 8.4 m）で、低い樹林が続き、強い南東貿易風を防いでいる。道路に沿って小石が整然と並べられ、各屋敷もよく整頓してある。道路による区画内には各屋敷があり、道路区画の外側にも屋敷地があるが、屋敷の境界はココヤシやアーモンド、ワンガイ（野生のスモモ）などの樹木の見通し線を用いているものが多い。

各屋敷には主屋と炊事棟、水浴場、洗濯場、倉庫、便所、天水タンクなどがセットになっている例が多い。雨季には屋敷内にも甘藷などを栽培する家がある。集落形態は疎集村である。

村落の西側はブッシュだが、北西側は微高地（6 m）となり、役場や公会堂から空港への道路が通じている。

東部諸島は、スティープン、ダーンリィ、マリーの3火山島に集落がある。スティープン島は戸数も少なく、集落は 20~25 m の台地上に立地し、ほぼ道路に沿って配置されている。

ダーンリィ島の集落は、南岸に1~8戸からなる9集落が散在し、小村状 (Hamlets, Weiler) をなしている。どの集落もココヤシとマンゴーの繁る海岸の小平地に立地している。

マリー島の集落は、A. C. Haddon の調査時には22の村が基礎的単位で、いくつかの村が集まって8つの地区を形成していた。現在でも1村ではなく、小村状を呈している。

トレス海峡諸島の伝統的な集落形態はクランを単位とする小村分散的であったが、キリスト教の伝来、布教によって、集落の再編成、整備が行われ、現在では、東部諸島を除いた島々で集住一村化（形態は疎集村・列村状）が進んでいる。このキリスト教の伝来にともなう集落の変化や、伝統文化とキリスト教とのかかわりについては、大島、橋本論文に詳しく展開されている [大島 1980: 113-136; 橋本 1979: 1-8]。

なお、東部諸島が小村状のまま現在に至っている要因として、次のようなことが考えられる。

東部諸島では、19世紀後半にはクラン社会がローカライズされ、定着性を高めていたこと（クラン的社会意識の残存）が、集村化の障害となった。他の島々では集落の定着性やクランのローカル性の弱かったことが集村化を容易にしたのであろう。さら

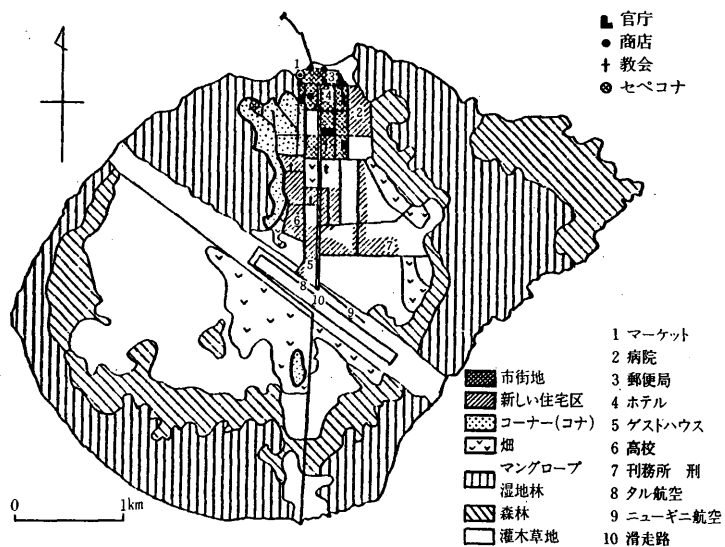


図4 ダルー島土地利用図

に居住のための自然条件や、東部諸島が他の島々に比べて農業が盛んであり、定着した石干見漁が行われたことなども一因と考えられる [橋本 1979: 1-18]。

## 2・2 パプア・ニューギニア南西岸

パプア・ニューギニア南西岸のダルーおよび対岸から、キワイ島などフライ川デルタ地帯は、低平な沖積地形が多く、ダルー島から見たパプア・ニューギニア南西岸はびっしり繁茂した濃緑の樹林が続いている単調な景観である。

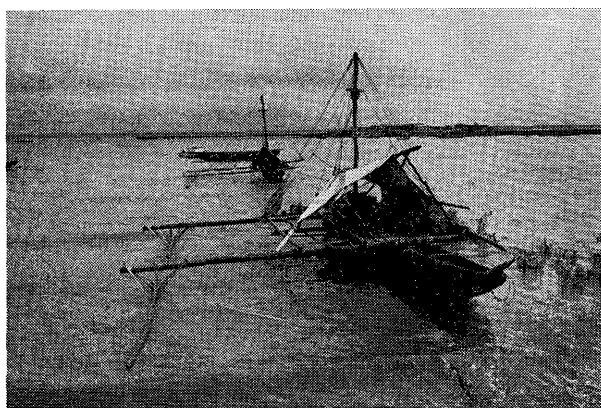


写真4 ダルー島と突堤、背後に低平なパプア・ニューギニア南西岸がみえる。(手前はタタクとよぶカヌー)

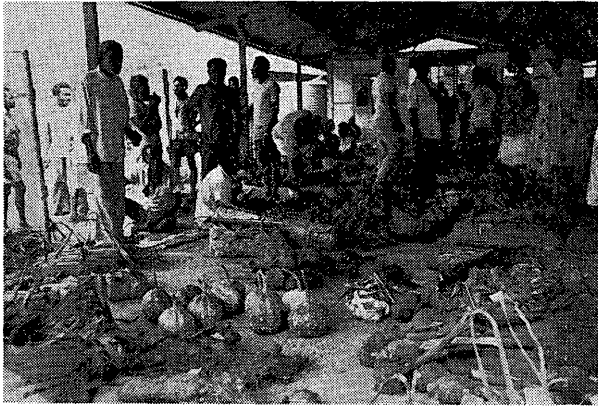


写真5 ダルーのネイティヴマーケット

ダルーは、パプア・ニューギニア西部州の首都である。ダルー島北寄りの海岸から内陸部の微高地にかけて市街地になっている。官庁街、ネイティヴマーケット、バーンズ・フィリップなど商店、ホテル、病院、放送局、教会、高校、刑務所。空港には首都ポートモレスビーを結ぶエア・ニューギニとローカルラインのタル・エアのオフィスがあり地域中心的な諸施設が集まっている。

とくにネイティヴマーケットには、サゴ澱粉、パパイヤ、バナナ、タロイモなどが対岸の村々やフライ川流域の村々からカヌーで運びこまれ、活況を呈している。

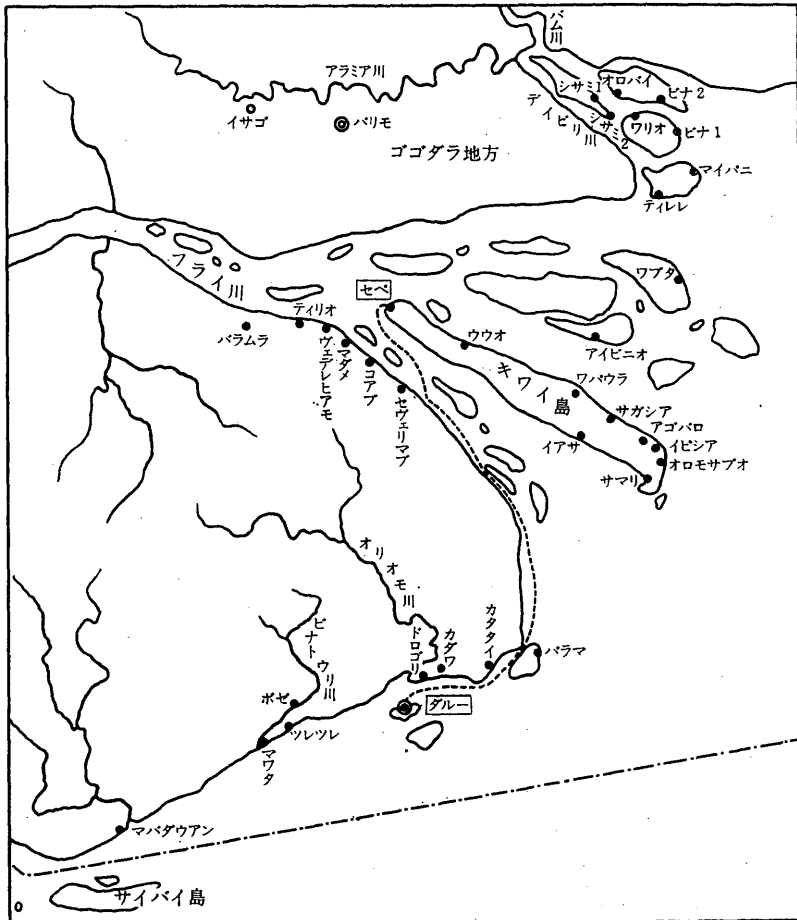
ダルーの市街地は整然とした区画で、樹冠のみごとな並木道が美しい。屋敷内の建物配置は比較的ゆったりしている。方形の屋敷地に対して斜めに家屋を配置したものもある。住宅は洋風熱帯住宅が多い。

新しい住宅地区は警察官官舎や教員住宅など画一的な建物が多い。最近では政府による新住宅が少しずつだが建ちはじめている。

ダルー市街地と新住宅区とに接した外側は、ニッパヤシぶきの高床住居が多くなり、景観が一変する。

ダルー島対岸やキワイなどフライ川河口のデルタの島々、フライ川畔の村々から来住した人々が、出身地別にコナ (Kona, Corner) とよばれるブロックや、広場を囲んだ形態の集村を形成している。

(A) 初期に来住しコナを形成した村は、対岸のマバダウアン (マワタを含む)、ツレツレ、カタタイ (カダワを含む) や、パラマ島 No. 1~No. 3、キワイ島のサマリなどである。比較的広い面積を占めており、とくにツレツレ・コナは広域で戸数も多い。マバダウアンやパラマ No. 1 のように市街地に接して街区を形成しているもの



- ダルーにコナを形成している村
- カヌーのコース(セベ→ダルー)
- ロングハウスの残っている集落(ゴゴダラ地方)

図5 ダルー・コナの本村分布図

もある。

(B) キワイ島のイアサ (No. 1, No. 2), イピシア (No. 1, No. 2), オロモサプオ, セベ。フライ川畔のセヴェリマブの村々がAグループに比べれば戸数は少ないが、各々コナを形成している。

(C) 比較的新しい来住村はキワイ島東岸のオロモサプオ, アゴバロ, サガシア, ワパウラ, ウウオと、フライ川畔のパラムラ, ティリオのグループで、ひとつの広場を囲んで大きな広場型集落を形成している。ピナトゥリ川沿いの内陸部に位置するボゼが5戸で小広場型集村, ドログリは2戸で小ブロックをなす。

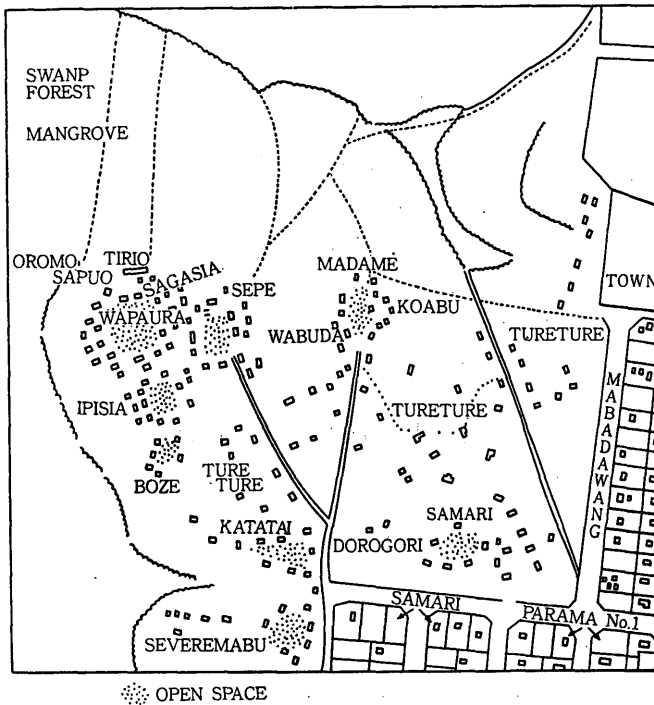


図6 ダルー・コナの主要部

(D) 空港の南側にはディビリ川河口付近やデルタ島にあるビナ1・2、オロバイ、シサミ、ワリオ、ティレレ、マイパニなどの村々から来住した約50戸によってひとつの広場（2つの広場がほぼ連続した形態）を囲んで広場型集村バムー・コナを形成している。

(E) その他クバイ、マラガ、ウェデレヒアモ、アイビニオ、ダマラ、クニニからの来住者もあるが、戸数も少なく、まとまった集落を形成していない。

一般に新しく形成されたコナほど立地も海岸やマングローブ湿地林に近く、悪環境となる。飲料水も古いコナの井戸に依存するところもある。

キワイ島北端に位置するセペを本村とするセペ・コナは、広場（ボポー bobóo）を囲んで家屋がほぼ南北方向に配置されている。本村の集落形態はセペ・コナと同じ広場を囲む集村であり、その広場は集会や踊りなどに利用している。

広場の名称は、パプア・ニューギニア南西岸のマワタやカタタイ、フライ川畔のセヴェリマブでは、スグ (sugu)、少し内陸に位置するボゼではププ (pupu) とよんでいる。

セペ・コナの場合、1956-1957年頃、本村から最初の移住が行われ、1965年には14





写真6 広場を囲むオロモサプオ・コナ

家族が移住していた。そのうち現在残っているのは3家族のみで、他は本村へ帰ったり、首都ポートモレスビーへ移動したりしている。現在22家族であり、1棟(1家屋)に2家族以上で居住するものが3例ある。

現在のセベ・コナの居住者で、1970年以降に來住した家族が12もあり、コナは実にめまぐるしく変動している。賃金労働の機会の多いダルーに來たが、一般に生活は貧しく、チャンスがあれば首都その他へ再移住するのである。コナは、居住者にとっては、一時的な仮の村なのであろう。

耕地はコナの近くに僅かと、空港近くを開墾し、マニオク、バナナ、タロイモ、さとうきびなどを作って生活の足しにしている。

キワイ島のセベからダルーまでカヌーで往來するが、凧で2日間、海が荒れると3～4日かかる。途中沿岸の村か、畑小屋などに寝泊りする。本村とコナとは密接に結びついているが、頻繁に往來することはできない。

キワイ島のセベ(本村)には、クランが約20あるという。セベ・コナにはその中のDudumabu(葦), Duwape(サゴヤシ), Mipari(毒のある実をつける木), Gagaripasa(竹の葉), Sokomabu(ニッパヤシ)の5クランがある。セベ・コナの家屋配置をみると、比較的同一クランの家が接近している傾向がある。

ダルー対岸にあたるパプア・ニューギニア南西岸の村落マワタは、ピナトゥリ川河口のマングローブ林をぬけた150m余のところに立地している。海岸の侵食によって移動したらしい。コリオ・スグ(korio sugu)とよぶ方形の広場を囲んで高床式の家屋が並んでいる(広場型集村)。

内陸のマシガラやドラゲリもほぼ同じ形態だが、集落全体の整備状況はマワタより

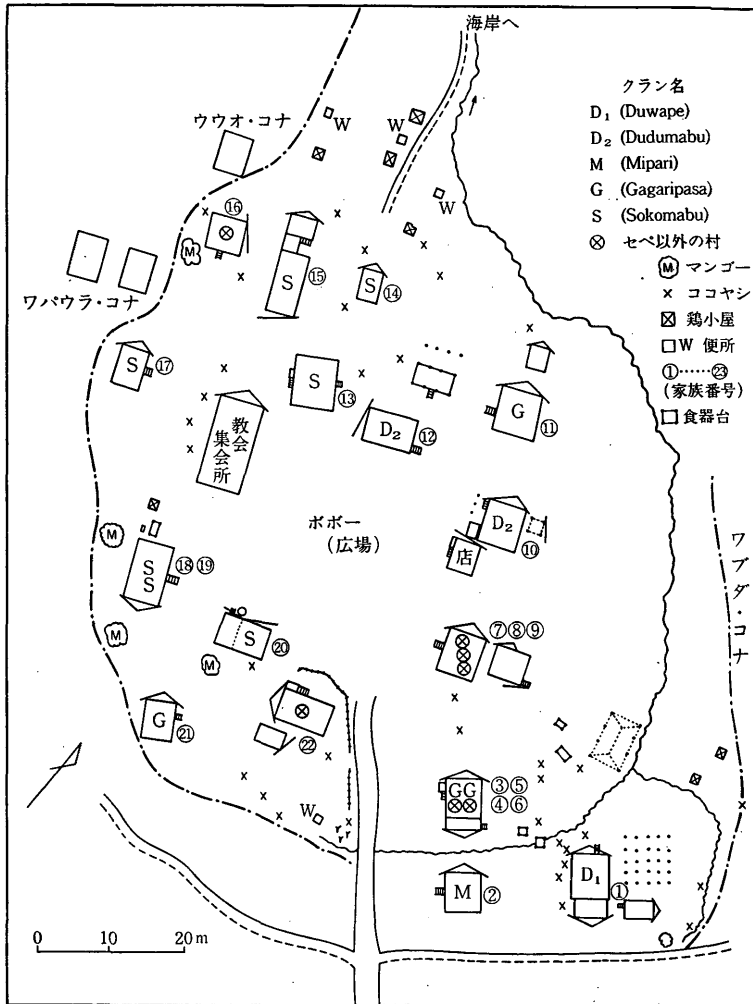


図7 セペ・コナ村落図

進んでいる。

マワタ村には6つのクランがあり、現在でも村落生活に重要な役割をもっている [松本 1980: 133-183]。

パラマ島では、集落立地が島の東岸のごく限られた範囲である。集落は現在でもクランごとの住みわけがみごとであり、1本の道路に沿って街村状の集落形態をなしている [大島 1980: 113-136; 1982: 43-63]。

キリスト教の布教によって集落の再編成が進み、クラン社会の変質したトレス海峡諸島とは、かなり異なっている。

なお、ダルーのパラマ・コナでは、クランごとのセグリゲートは崩れている。

メラネシアの村落では、これを構成する親族集団の性格によって集落形態と密接に関連している [石川 1970: 27-39]。

ダルーの各コナの本村は、その村落の新旧などによって差異もあるが、一般にクランと密着した家屋配置をもつ広場型集村形態が多い。

ダルーの各コナには、本村の村落意識がもちこまれている。広場を囲む集村形態は本村と類似しているものが多いが、親族集団と集落形態との関連は、各コナによって濃淡はあるが、本村に比べて稀薄化しているものが多いようである。

### 3. トレス海峡諸島の伝統的住居

#### 3・1 ハッドン調査隊の報告を中心に

トレス海峡諸島の住居に関する研究は少ない。トレス海峡のパプア・ニューギニア側をみると、山地地域の調査研究はかなり集積されているが、一般に海岸部の資料はごく限られている。

A. C. Haddon を中心としたケンブリッジ大学学術調査隊のトレス海峡地域の研究は、大規模な実地調査の先駆けとして知られている。住居に関しては、6巻の研究報告のうち、第4巻の1章としてとりあげている。Haddon と A. Wilkin が住居を分担し、探検家などの見聞による資料を用いて不足分を補っている [WILKIN and HADDON 1912: 19-93]。

この調査は19世紀の終末期に行われているから、主として約80年前の状況を知ることができる。

トレス海峡諸島については、西部諸島と東部諸島に分け、西部諸島については、南部・中部・北部に区分して住居の特色を示している。東部諸島については、過去にかなり優占的であったと考えられる円形住居（現在消滅）をとりあげているのは貴重である。さらにトレス海峡の近代的住居に関する記述が注目をひく。当時新しいタイプとして south sea（ポリネシア、メラネシア）からの外来者によって導入された住居型がみられ、これがほとんど古い型と根本的に異なっていることを指摘している。パプア・ニューギニア南西岸の住居や、フライ川河口地域（とくにキワイ島）のロングハウスについても詳しく報告している。

Haddon 隊の報告以外に G. Landtman が行ったキワイ島の民族誌の中にロングハウスの建築と呪術に関する詳細な報告がある [LANDTMAN 1927: 4-22]。

以下本章では Haddon 隊の住居に関する報告の中からトレス海峡諸島の住居の諸特色をとりあげる。

西部諸島の南部のプリンス・オブ・ウェールズ島では、①単純な長方形の2方か3方を細い柱か樺で囲み、ティ tie の木 [ubu] (*Melaleuca leucadendron*) の樹皮を用いた屋根をもつ地床住居、②2～3フィートの高床で、先が分岐した柱が棟木を支える簡単な屋根をもつ民家の2タイプが古い型であり、Haddon はそのスケッチを残している。トレス海峡西部諸島では、南部から北部へ行くほど明らかに住居の質が向上しているとしているが、北クインズランド民族誌の著者 W. E. Roth の説 [Roth 1910: 55-66] を引用するなど、これはオーストラリア大陸北部クインズランドのアボリジンの簡素な円形住居との比較の上からの解釈と思われる。

西部諸島中部としては、ヤム、ナギール、ツツ、スー、バドゥ島の民家を記載している。

ヤム島の住居は主に竹造りで屋根は草とティの樹皮で葺かれている。ナギール島(現在無住)では骨組は竹で作られ、屋根は長い雑草で葺いてあった。

住居は1軒ごとに狭いが囲いの中に建ち、反対側の海岸には調理用の小屋がある。火はその中でおこされる。

ツツ島(現在無住)の民家は南海型(高床)で、数は少ないが住居は塊状をなし、フェンスで囲まれている。しかし旧式(古い型)の民家(地床式の小屋)もあった。スー(ワラビール)島では、亀獲りに行く時の一時住まいの小屋と思われるものを記している。バドゥ島には、地床で切妻屋根の小屋、ニューギニア型の高床の小型の家、大型で造りのしっかりした草造り高床式の家で南海の人々によって建てられ住んでいる、3種類の住居があった。

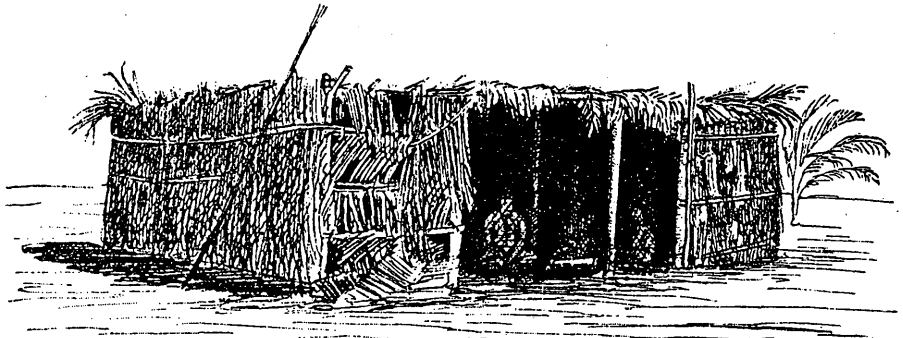


図8 マビオグ島の Kwod のスケッチ  
[WILKIN and HADDON 1912: 98]

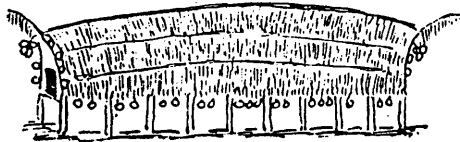


図9 マビオグ島のヘッドハウスのスケッチ  
[WILKIN and HADDON 1912: 98]

マビオグ島民の住居もバドゥ島と非常に類似している。

島民の話によると、マビオグ島では地床式の家が古型で、白砂の上に草とマットが何重にも敷かれていた。屋根の材料は草とティの樹皮であった。

男性、とくに独身男性は kwikwi-iut と kwod で寝ていた。1888年に画かれたマビオグ島 Bau の kwod のスケッチがある。広い入口があり、平らに近い緩やかな片流れ屋根はココヤシ葉で葺かれている。7.5×4.5 m の規模で、高さ 1.8 m。kwikwi-iut が混雑したりすると、kwod が会合場として使われた。kwikwi-iut という名称は、ヘッドハウスを意味している。報告書にはマビオグ島の2つのヘッドハウスのスケッチがある。高床（杭上）で、両端に出入口があり、頭蓋骨や顎骨がぶらさがっていた。ココヤシ葉葺き切妻屋根で、両端と軒、そして柱は赤く塗ってあった。ひとつずつ胞族 (phratry) が所有していたと推定している。頭蓋骨は戦争で殺した敵のものであった。女性と少年はヘッドハウスに入る事は禁止されていた。

ヘッドハウスはサイバイ、アウリド、ヤムにも似たものが存在したらしい。キワイ島のロングハウス（後述）と非常に似ている。

kwod は若者や独身男性用で、簡単な一時的住居であり、元来ヘッドハウスの離れ小屋のようなものとみなされていたらしい。

ヘッドハウスは若い男性が寝泊りするクラブハウスとしての社会的役割を果たしており、これが19世紀末まで残存していた原因と考えている。

サイバイ島とダウン島では1888年、高床の南海型が進出しはじめていたが、古い型も杭上の家屋であったことを強調している。竹材を用い、側壁などはパンダナスの葉を使っていた。1888年 Haddon のサイバイ島民家のスケッチがある。この民家は高床だが、下部をココヤシの葉で編んだ壁でざっと囲っている。当時ボイグ島民が首狩りや海賊のためサイバイ島に避難し、高床下に収容し、そのためになされた型だと説明している。旧い型と南海型の折衷のようにも見える。サイバイ島の高床（杭上）家屋の一つは宣教師が建てたミッション様式と言われていたことも注意してよい。

なお、サイバイ島に以前、男性の家 (iota) があったことを島民から聞きだしているが、当時フライ川デルタの島（キワイ島）などに濃厚に男の家が存在していたことから、充分可能性はある。

東部諸島（ステイーブン、ダーンリィ、マリー島）では meta（パプア・ニューギ

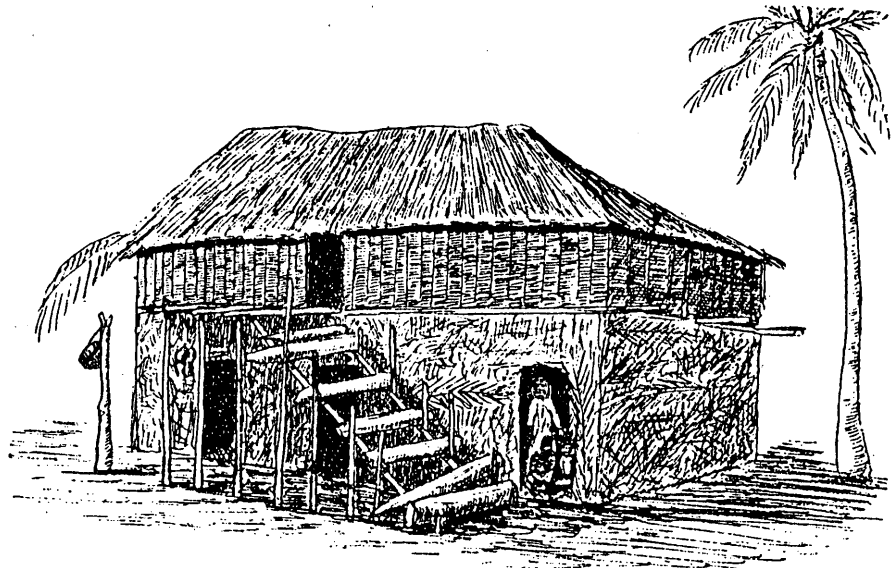


図10 サイバイ島の高床民家スケッチ  
[WILKIN and HADDON 1912: 100]

ニア南西岸では住居を *moto* と呼ぶ) とよばれる円形住居が注目される。

極めて初期にトレス海峡を航海したイギリス人の中には、不正確だが *kaub kaub meta* という蜜蜂の巣のような円形住居に言及したり、描写するものがあった。Haddon 隊の調査時には、ダーンリィ島に小型円形住居が1戸（島の北か北西に大型が1戸あると言われている）、マリー島には中型が1戸あり、また円形住居と共通した特徴をもつ小屋があった。

円形住居の規模は家族数によって様々であった。小型は直径4~5m、高さもほぼ同じ位。大きなのは直径9m、高さ6mであった。

中央の柱の頂上には、細いつるが巻かれ、唯一の外装となっている。以前は大きな貝が屋根の上に置かれ、屋根は乾燥した草で葺いてあった。数束の草が中央の柱が突出した頂上に集められる。長いつる草で骨組の木舞にくくりつけられる。

円形住居建築構造を詳しく記述しているが、要約すれば次のようになる。

第1歩は円周の画定で、砂に片足で跡をつけるだけ。ダーンリィ島の小型円形住居に関する記述では、柱が8~10本等間隔に直径4.5mの円を形成するよう地面に打ち込まれる。その柱の内外両面に3つの竹の輪が同じ高さに結びつけられる。その後、長い竹の柱を直立に輪のまわりはかなり密にして結んだ。その端を集めて中央の柱に結びつけるため、アーチ型になる。

この骨組に草と細くさいたココヤシの葉を屋根葺材として非常に厚く編み結びつける。出入口は小さく、這って入らねばならない。

北クインズランドのアボリジンの円形住居は、これよりはるかに単純な構造であり、東部諸島の円形住居と同一のものではない。

Haddon 隊の Wilkin による円形住居の断面図や平面図をみると、全面ではないが、半分近くが就寝用の竹床であり（地面より 70~75 cm, 高いもので 1.2 m）、物置棚風のものもある。地面（砂地）は 15~16 cm 盛り上げられ、ここでも就寝したらしい。入口を入ったところは土間で、入口と中心柱の間に炉がある。多くは 1 住居に 1 家族である。調査時にすでに南海型 (south sea type) の住居など新しい様式が入り、円形住居は僅少であったが、過去には東部諸島で優占的な様式であったようである。なお、マリー島に残っていた古い家（当時、空屋で荒れていた）として、一端が円くなった長方形の平面をもつ、円形と方形の折衷型の民家を報告している。

円形住居は Haddon 隊の調査時すでに減少しており、現在は消滅しているから、その点で、Haddon 隊の円形住居に関する報告は貴重な記録といえる。

ダーンリィ島を調査した瀬川隊員の報告によると、ダーンリィ島で過去に円い家があり、地べたにへばりつくように這って出入りしたことを老人が人から伝え聞いた話として語ってくれたという。

Haddon 隊の報告は調査当時のトレス海峡の近代的住居について次のように述べている。

「マリーとマビオグ島の原住民は、現在住んでいる近代住居に関しては多くを語る

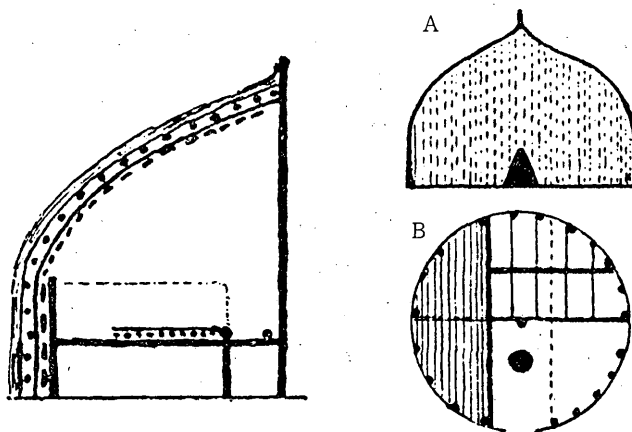


図11 ミリアム円形住居の平面図と断面図  
[WILKIN and HADDON 1912: 102]

必要はない。様々なポリネシア人やメラネシア人ら外来者が導入したモデルに従ってすべて建築されている。ほとんどどの面からみても、古いタイプとは根本的に異なっている。住居の変遷に継続性はなく、新型は伝来してすぐ受け入れられたらしい。旧式より優れていたというよりは、商人や宣教師が持ち込んだ新しい生活様式と関係していた」[WILKIN and HADDON 1912: 105]。

Wilkin は図によって数戸の近代住居（ミリアム住居：東部諸島）を示している。

事例1 4.5m×3.3m, 高さ2.7m, 草葺屋根で側壁はココヤシ葉を編んだもの。屋内2/3位は45cmの高さの床があり、入口を入ったところから中央にかけて土間で、炉がある。家は海岸と平行に位置するものが多い。南海型の建築が伝来するまで窓はなかった。

事例2 典型的なダーンリィ, マリー, マビオグ島の南海型住居で, 規模は12m×5.4m, 高さ3.9m, 四方の壁と出入口の高さは1.55m。出入口は海側と反対側の壁のほぼ中央にある。海に面する側だけ図のように戸口の両側に, 軒の下あたりに小窓がある(60cm×45cm)。壁はココヤシの葉を編んだものが何層にも互いに重なり合っていた。屋根は草葺きで, 庇のない寄棟型。棟木上の草葺きは丈夫に編んだ材料で仕上げていた。間口と奥行の比率は2:1, 壁の高さ, 家の高さからみて, かなり急勾配であったようである。屋内は1室型で, 表から裏へぬける幅1.2m通路を除いて床(37~38cmの低い床)が割り竹でつくられていた。通路(土間)の真中に炉があった。多くの住居では床高は事例2より高いが, 面積は限定されていたし, 住人の好みと必要条件によって種々であった。

事例3 マリー島では数戸の杭上家屋(高床)があった。その1例。杭上家屋はニューギニアの建物と類似しており, 多くの原住民が布教船や通商スクナーで航海中にみる機会があったという。

規模は9.3m×6.9m, 高さ3.9m, 杭の高さ1.35m, ココヤシ材が使われていた。ベランダがあり, 出入口は側壁の中央に位置していた。屋根は草葺寄棟, 梯子は後方の出入口についてい

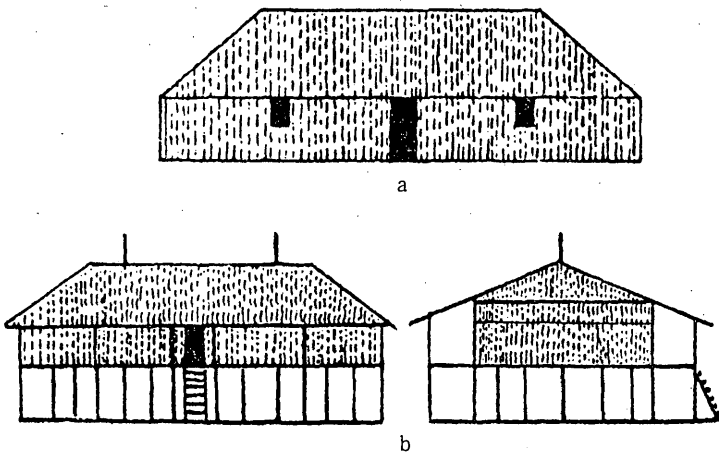


図12 近代住居 a ミリアム住居, b 高床式住居(マリー島)  
[WILKIN and HADDON 1912: 108-109]



た。床は竹。側壁はココヤシ葉を編んだものである。

事例4 小型倉庫で、4.5 m×3.0 m、高さ 2.7 m、草葺の壁は 1.2 m、屋内は床高 30 cm の低床があった。以前円形住居が多かった時代に、粗雑なドーム状の差掛け小屋 *eud meta* があったが、これに代るものとみている。

事例5 マリー島には菱形の建物で、最長約 10 m、最大幅 6 m 余、海側の2面に出入口がある。家の頂点までの高さは 4.2 m、中央の柱が少しとび出している。草葺屋根、建築材としてココヤシの切り株なども使用されていた。内部は土間が広く、床高 75 cm 前後の床が2カ所にあった。

この中央に柱をもつ菱形平面の住居は、円形住居との関連を示す証拠はないとしているが、構造からみて興味をひく。

Haddon 隊調査時、住居様式として新しく導入された要素をまとめると次のようになる。

㊸ 従来土間式が大半であったのに対し、高床（杭上家屋）の導入が目される（但しマビオグではほとんど土間式であった）。㊹ 現在より低い、側壁がはっきりした形を整えたこと。㊺ 屋内1室形式で土間部分に炉があるが、床（高さは多様）部分がみられること。㊻ 現在の住居に比べて小さく数も少ないが、窓がつけられたこと。㊼ ベランダをもつ家がみられること。

## 4. トレス海峡地域住居の諸特色

住居形式は、建築材料、高床式（杭上家屋）と地床式（土間住居）、平面型（間取り）と住まいかた、付属建物など構成要素に分解して考察する。住居は上記のほかに屋敷地、さらに集落との関連なども重要である。その概況については前述した。

住居はこれら構成要素の統合されたものとして把握する必要があるが、住居は文化複合体であり、これを一括して把握することは非常に困難である。本章では構成要素別に、トレス海峡地域における現在（1975～1979年）の住居について、その特色を探ろうとする。さらに Haddon 隊調査時（19世紀末）と比較し、住居様式の変化を追跡する。高床住居や円形住居、ロングハウスなどについては、東南アジアやオセアニア（とくにメラネシア）地域との比較を試みたい。

### 4・1 建築材料（屋根、壁面を中心に）

#### 4・1・1 トレス海峡諸島

19世紀末に行われた Haddon 隊の調査によると、当時は屋根や壁面はココヤシの

葉を編んだものも多く、草類も使った。島によってはティ (tie) (*Melaleuca leucadendron*) の樹皮を屋根材に使った。建築材 (構造材) はマングローブやココヤシ、竹材が用いられた。

フライ川デルタやパプア・ニューギニア南西岸ではニッパヤシ (*Nipah fruticans*) の葉が多く、サゴヤシ (*Sagus rumphiana*) の幹なども利用した。ほとんど手近な素材を利用していたのである。

Haddon 隊の調査から80年を経過した今日、とくにトレス海峡諸島の住宅は大きく変化している。

近年トレス海峡諸島に対しては、オーストラリア連邦政府やクインズランド州政府の手厚い援助があり、連邦政府や州政府資金による住宅の建設やミッションによる住宅建設が進んでいる。

オーストラリア国立大学の H. Duncan は、バドゥ、サイバイ、マリー、ヨーク4島の住宅を調査している [DUNCAN 1974: 31-39]。連邦、州政府資金による住宅がヨークで76%、バドゥ54%、サイバイ35%、マリー島で44%を占め、壁材料もアルミニウムプレハブ、トタン、繊維質板 (石綿など) が大半を占めている。ココヤシの葉などを材料とした伝統的な民家はマリー島で38%あったが、他の3島ではほとんど姿を消している。マリー島でも1975年8月北大路氏の見聞では、ほとんど消滅しているという。

マビオグ島では、1975年、36戸 (うち空屋2戸) 中20戸 (56%) が、連邦および州政府資金による画一的住居である [松本 1977: 121-143]。

木曜島北側に位置するハモンド島は、Haddon 隊調査時は無人島であったが、トレス海峡の島々から、カトリック聖心派が信者を集めて新しく村づくりをした (1928年)。1975年戸数29 (29) [( ) 内1979年]、連邦資金住宅 [アルミニウムプレハブ、高床式、鉄パイプ] 4 (6)、ミッション資金住宅 [ブロック] 4 (6)、個人資金住宅21 (17)、旧校舎利用1 (0) となっている [杉本 1977: 95-113]。

ボーグ島では30戸中、連邦2、州10、個人資金住宅18。中部諸島のスー島では23戸

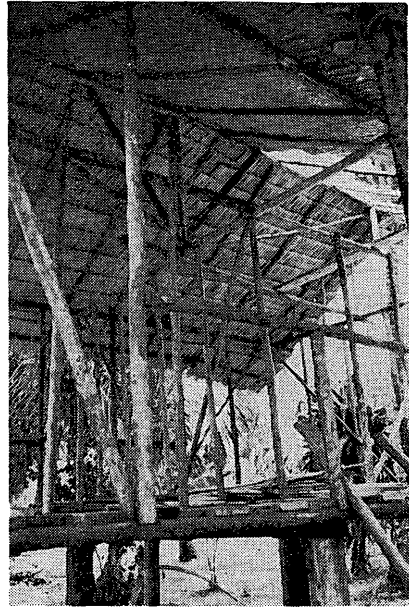


写真7 構造材はマングローブを用いることが多い (ボゼ・コナの民家)

中、連邦2，州4，個人資金住宅17。東部諸島のダーンリィ島では33戸中、連邦5，州4，東部3島の共同組合(EMU)資金住宅4，個人資金住宅20である。

個人資金による住宅は他の島でも同様だが、一般に北クインズランド型とよばれる高床式の洋風熱帯住宅が多い。コンクリートで基礎をつくり、少し床をあげた型(地床式)もみられる。

木曜島はトレス海峡諸島の中では居住の歴史も浅く、本格的居住は植民地拠点となった1877年以降になる。したがって当初からトレス海峡諸島民の伝統的民家とは別系統の白人による北クインズランド型洋風住宅が建設されたものと考えられる。トレス海峡の政治、経済の中心となった木曜島の家屋型が新しいハウスタイプとしてトレス海峡の島々に普及し、さらに連邦や州、ミッションによる新住宅が建設されたため、伝統的民家は急速に減少していったのである。

1864年センサスで、個人住宅屋根材料についてクインズランド州全域(Q)と北部クインズランド(NQ)を比較すると、板葺では40%(Q)/14%(NQ)、カンヴァス10%(Q)/25%(NQ)、樹皮45%(Q)/58%(NQ)となり、当時は北部クインズランドでは、より一層手近な素材を利用していたことがわかる [SUMNER 1974: 47-61; RON 1978]。1921年センサスではトタンが急増して95%(Q)/90%(NQ)となっている。

1966年と1971年のセンサスによって、クインズランド州全域の家屋壁面の材料についてみると、煉瓦4.9%→9.0%、煉瓦とベニヤ板2.4%→5.1%、コンクリート2.4%→2.9%、木材71.2%→65.9%、トタン1.8%→1.7%、アスベストセメント(石綿板)17.2%→15.1%となっている。この年代では大きな変化はみられないが、全般的に木材使用が減少し、煉瓦などの増加が目立つ [AUSTRALIAN BUREAU OF STATISTICS 1974]。

木曜島では1975年9月、住宅は市街地231戸、新集落タモイ60戸だが、1979年8月市街地271戸、タモイ71戸となり、住宅はかなり増加している。

屋根材料はほとんどトタンであり、波状トタン(corrugated iron)、小波状トタン(ripple iron)、薄鉄板(sheet iron)など各種のタイプが混在している。スレートなどもみられる。

このトタン屋根は、木曜島の場合、1898年のHaddonの調査記にも記載されている [HADDON 1932] から、当時木曜島ではトタンがすでに普及していたことが明らかである。

家屋壁面の材料についてみると、木曜島市街地では、繊維質板(石綿など)48%

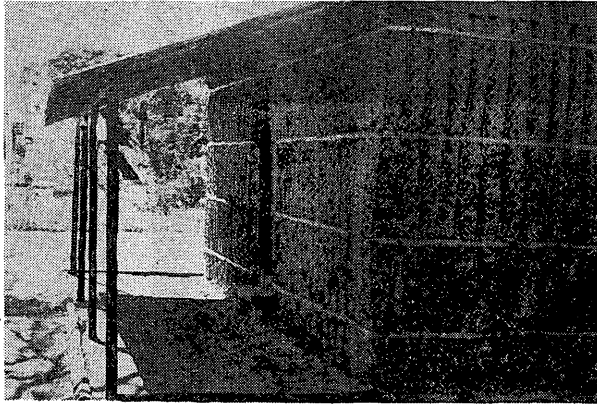


写真8 伝統的なココヤシ葉を用いた民家（スー島）

(51%) [1975年9月, ( ) 内1979年8月], 木材(下見板もあるが, これは戦前のタイプといわれている) 30% (20%), アルミニウムプレハブ10% (23%), トタン10% (4%), ブロック2% (2%) となっている。木曜島では, トタン屋根で木造, 下見板の外壁をもつ住宅が古く, 最近ではトタン, 繊維質板(石綿など), アルミニウムプレハブなどが多くなっている。最近中心街密集地区の新築建物は, 防火的なレンガ, ブロック構造を義務づけているし, 一般ブロック住宅もあるが, 熱帯の住環境に適したものとはいえない [杉本 1977: 1-19]。

トレス海峡の他の島々でも, 屋根材料はほとんどトタンが普及している。伝統的なココヤシ葉を用いたもの(ココヤシの葉を編んでシートをつくり, これを半重ねにして葺く)は, 最近まで交通不便だったスー島(スー島にはココヤシ葉を編んだものを

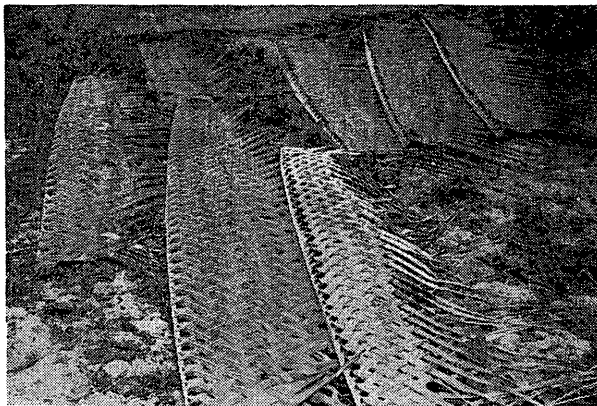


写真9 ココヤシ葉を中肋でわけて編み, シートを作る

用いる民家は23戸中9戸、そのうち壁面も屋根もココヤシ葉を用いたものは2戸しかない)とココナツ島に僅かに残っているのみである。パプア・ニューギニア南西岸に近いボイグ島には、ニッパヤシの葉を使った高床住居が2戸ある。これは対岸のマバダウアンからの移住者である。

壁面の材料は、ハモンド島では石綿が多く(38%)、アルミニウムプレハブ24%、トタン14%、ブロック24%。スー島では石綿39%、アルミニウムプレハブ12%、ココヤシ葉39%、マビオグ島では石綿68%、トタン25%、バドウ島では石綿53%、トタン26%、アルミニウムプレハブ21%となり、いずれも新しい材料である。屋根の場合と同じく、伝統的材料はごく最近まで交通不便だった小離島スー島やココナツ島などに残っているのみである。

#### 4・1・2 パプア・ニューギニア南西岸

パプア・ニューギニア側のダルー市街地に接した外側に位置するダルー・コナのうち11のコナについて調査をした。11コナ全般についてみると、屋根材料はニッパヤシの葉を用いたものが49%、トタンが51%。壁面材については、ニッパヤシ47%、トタン25%、石綿12%、残りはトタン、石綿、ニッパヤシ、パンダナスなど各種材料を併用してバリエーションに富んでいる[杉本 1981: 54-58]。

屋根と壁面の材料について、伝統的な総ニッパヤシ造りの民家と、トタンや石綿など新しい材料からなる民家を両端とし、その間に過渡的なものとして7種類を配列し11コナ別に集計したのが表1である。各コナはほぼ来住時期の古いものから並べたが、

表1 屋根、壁面の材料(ダルー・コナ) (1979.9)

コナ	屋根材		壁材						計	
	トタン	トタン	トタン	トタン	ニッパ	ニッパ	ニッパ	ニッパ		
	石綿	トタン	ニッパ	トタン	トタン	石綿	トタン	ニッパ	トタン	
マバダウアン	12	5	1	1	1	1	1	0	0	21
パラマ No.1	5	7	1	0	0	0	0	0	2	15
ツレツレ	5	20	5	8	2	0	3	12	55	
カタタイ	2	2	0	1	0	1	1	4	11	
サマリ	3	9	3	5	1	2	1	4	28	
セペ	0	2	1	4	0	1	1	7	16	
イピシア	0	0	0	1	0	2	1	14	18	
セヴェリマブ	0	0	0	0	0	1	4	10	15	
マダメ/コアブ	0	0	0	1	0	0	1	14	16	
ワブダ	0	0	0	0	0	0	0	6	6	
ボゼ	0	1	0	1	0	0	0	3	5	
計	27	46	11	22	4	8	12	76	206	



写真10 すべてニッパヤシ葺きの高床民家（マダム・コナ）

コナ自体変化が激しく、来住の古いコナでも、新移住者が多くを占めているところもある。

比較的早く来住したマバダウアン，パラマ No. 1 は市街地に接する区画にあり，すでに街区の一部をなしている。これらのコナはトタンや石綿板を用いたものが80%を占め，伝統的材料を用いたものは皆無か僅少である。

ボゼ，ワブダ，マダムなど新しいコナほど，立地も海岸や湿地林に近くなり，ニッパヤシやパンダナスなど伝統的材料を使った民家が多くなる。新旧の各種材料を併用した過渡的な家も目立ち，これがコナの村落景観を雑然としたものにしていく。

ダルー・コナの場合，ニッパヤシの葉は，対岸のオリオモ川流域のものが多い。軸には竹を使い，ニッパヤシの葉を二つ折にして，葉柄でとめる。長さ約 1.7 m，幅約 80 cm のシートをつくる。

セペ(キワイ島)ではコボボウエリ (kobo bo weri)，フライ川畔のセヴェリマブではナウエリ (nau weri)，ティリオではエラドガ (eradoga) など種々の名称がある。

このニッパヤシのシートは半重ねにして

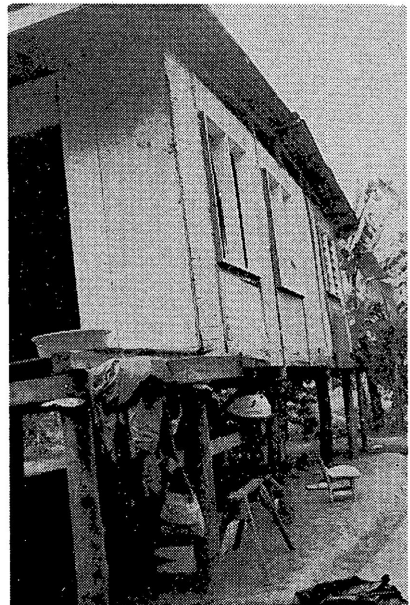


写真11 トタン屋根，石綿壁，ルーバ窓つきの民家（マバダウアン・コナ）



写真12 ニップヤシの葉を編んでシートを作る(マダメ・コナ)

葺きあげ、押えに竹を使っているものが多い。棟の部分は二重に葺く。屋根の場合約2年で葺きかえる場合が多い。サゴヤシの幹の一部(表皮)を使う例もある。

僅かだが、パンダナスの葉を編みあげたもの(パテレ, patere)を壁材に使う家もある。屋内の部屋の間仕切りにもニップヤシを多く用いている。

パプア・ニューギニア南西岸のマワタでは、14戸全戸がニップヤシ葺きの屋根、壁面も全戸ニップヤシの葉を編んだものを用いている。水浴用のシェルターも、商店も、教会もニップヤシづくりである。新材料トタンはみられない[松本 1980: 133-183]。

ダルーの各コナで本村の状況をきくと、コナよりも伝統的材料が多く用いられているという。ほとんど新建材になったトレス海峡諸島の民家とはかなりの格差がみられる。

#### 4・2 屋 根 型

屋根型は全般に切妻型が多い。Haddon の報告書では寄棟型の記述があるが、現在では切妻型が大半を占めている。ベランダとの関連もあり、庇をもつものが多い。

木曜島には洋風熱帯住宅の各様式があり、切妻以外に寄棟、方形ピラミッド、入母屋、片流れなどがある。個人の嗜好も反映しているのであろう。

スー島、ココナツ島に僅かに残るココヤシ葉葺きの住居も全部切妻型で、棟の両端と中間に1本加えた棟持柱をたてた簡素な構造である。

パプア・ニューギニア南西岸では、ダルー市街地がやや木曜島と類似しているが、切妻型が大半である。ダルー・コナでも新旧材料共切妻が多く、単純な片流れ屋根が少しある。小屋など付属建物には片流れが比較的多い。

4・3 高床式（杭上家屋）と地床式（土間式）

4・3・1 トレス海峡諸島

トレス海峡諸島では、19世紀末には、単純な屋根をもつ地床式住居が優占的であった。現在消滅しているが、東部諸島にあった円形住居は、全面土間ではなく、一部に床が張られていた。当時の新しいタイプの住居として、長方形（方形）平面で狭い土間と低い床をもつ型と高床住居（杭上・高さ1.3m）があった。これらの型は南海やパプア・ニューギニア海岸部の建築様式の折衷型である [WILKIN and HADDON 1912: 93-119]。

現在トレス海峡の島々では高床住居が過半を占める[表2]。地床式ではコンクリート床のものや、コンクリートで基礎をつくり、少し床をあげた(40~50cm)型が多い。かつての地床様式の残存形態かもしれない。近年建てられた連邦政府住宅は鉄パ

表2 高床, 地床の分布

地域, 村落		指 標		地 床	計
		高 床			
		high block	low block		
ト レ ス 海 峡 諸 島	木曜島市街地	137	105	29	171
	タモイ	43	26	2	71
	ハモンド	14	1	14	29
	スー	3	2	18	31
	ヤム	6	15	10	31
	ヨーク	5	14	9	28
	ボイグ		16	14	30
	マビオグ	3	13	12	28
	バドゥ	12	31	15	58
ダーンリィ		21	12	33	
ダ ル イ ・ コ ナ	サマリ	26	2	0	28
	セペ	14	2	0	16
	イピシア	16	2	0	18
	パラマ No.1	13	2	0	15
	マダメ	12	4	0	16
	ワブダ	6	0	0	6
	ツレツレ	43	12	0	55
	カタタイ	11	0	0	11
	ボゼ	5	0	0	5
	セヴェリマブ	6	9	0	15
マバダウアン	21	0	0	21	
南 西 岸	マワタ	7	7	0	14



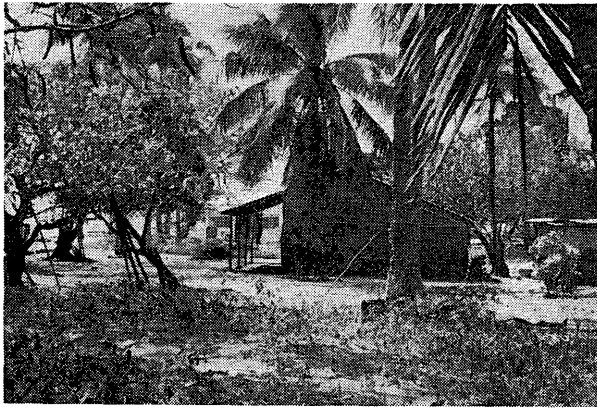


写真13 伝統的民家は主屋と炊事舎（右端）が別棟形式（スー島）

イブの高床式，州政府住宅はコンクリート床の地床式が多い。スー島などに僅かに残っているココヤシ葉づくりの伝統的民家の事例を示す。

事例（スー島） 切妻トタン葺，ココヤシ葉壁，規模 6.0 m×6.2 m，これに 1.65 m の庇が出ている。ココヤシの葉を編んだシート (2.7 m×0.6 m) [ワルバウ・ピウ warbau piu] を 30 cm ずつ重ねて壁面をつくる。外側はヤム島産の竹で押える。屋内は一室だが，最近奥から 1.8 m 幅に柱をたて，ビニール幕を張って 2 室にしている。この狭い奥の空間は砂地で，物置。他の部分は寝室，居間 (utui-lag, niai-lag) で，40 cm 盛土をし，板床を並べて，パンダナス製のマットを敷いている。炊事場は別棟で四方トタン壁で土間 (砂地)。食事兼作業場である。小突出部にガスレンジを置いている。

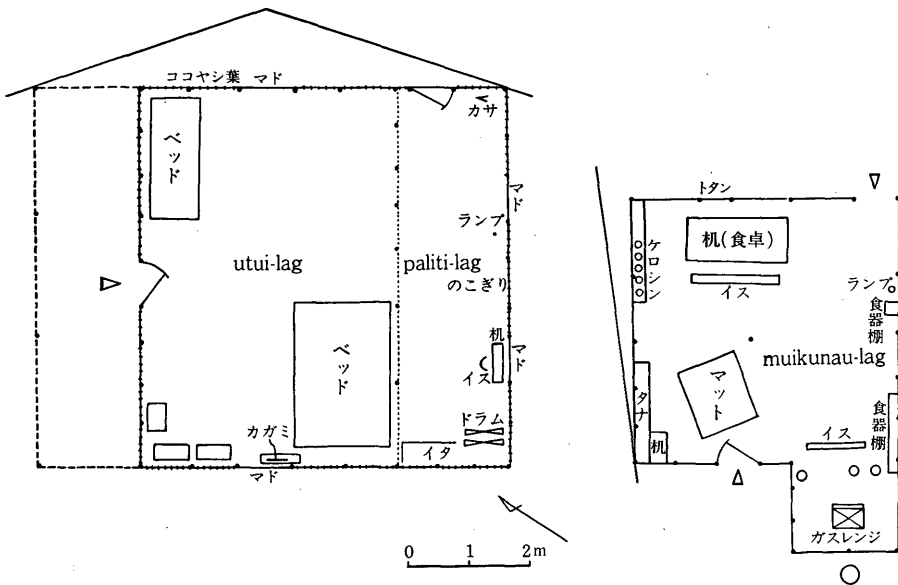


図13 スー島の伝統的民家間取り

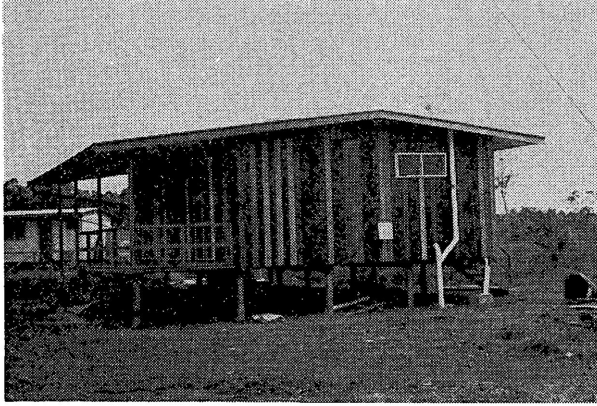


写真14 パプア・ニューギニア政府住宅局資金による住宅（ダルー）

ボイグ島の場合は、対岸マバダウアンからの移住者で、本村と同じ高床式である。

トレス海峡諸島では北クインズランド型とよぶ洋風熱帯住宅が多く、高床が特色である。この高床は、1 m 前後 (low block) と 1 m 以上 (2 m 前後のもの) (high block) に区分している。

木曜島市街地では low block 39%, high block 51% である。タモイでは low block 37%, high block 61% である。一般に high block の家は新しい型といえる。

木曜島での low block と high block の分布は錯綜している。一般に傾斜面では一方が高床となるので high block は傾斜地区に比較的多くなっている。

高床の家では、床下に洗濯場、干場を設けるものがあり、閉鎖して物置や車庫としている例もある。天水タンクを設置している家も多い。

北部クインズランドでは、古い型は一般に粗末な木造で地面に直接家を建てるか、

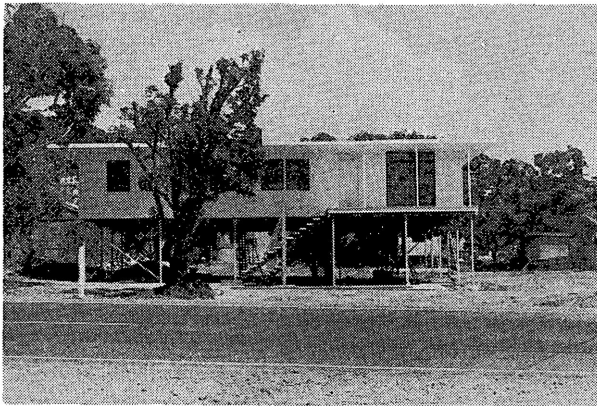


写真15 オーストラリア連邦政府資金による住宅（木曜島）

10～20 cm 程度の低床のものが多い。現在多くみられる 1～2 m の高床住宅は1900年以前にはほとんどみられなかった [SUMNER 1974a: 17-24]。

古い木造家屋は杭も木材だが、白蟻の害があり、コンクリートや鉄パイプが増加している。バドゥ島でも86%、マビオグ島で63%がコンクリート杭や鉄パイプを使っている。

#### 4・3・2 パプア・ニューギニア南西岸

ダルー市街地の洋風熱帯住宅は高床が多いが、低床の官舎などもあり、木曜島と類似している。

政府住宅局 (National Housing Committee) の新住居は、いずれも高床だが、とくに高級のもの (H 型) は 2 m 近い鉄パイプを用いており、オーストラリア連邦政府資金住宅と類似している。

ダルー・コナの住宅は、主屋がすべて高床である。

高床の高さは計測した主屋15例 (14のコナ) の平均が 1.3 m あるが、0.59～1.86 m までかなり多様である。一般に 1 m 以上の高床と、1 m 以下 (50～60 cm 多し) の低床に分けることができる。

11コナの計206戸についてみると、高床84%、低床16%である。

低床の住宅は一時的な仮住居で、規模の小さい家がほとんどである。

パプア・ニューギニア南西岸や、フライ川デルタ地帯の民家も主屋は高床式が主である。炊事小屋や鶏小屋など付属建物や集会所、小学校などは地床式である。

ダルー市街を除いて杭の材料は大半木材であり、新建材はまだ導入されていない。

杭はマングローブ樹が多く、ほとんどの村でアボ (abo) とよぶ (内陸のホゼ村では

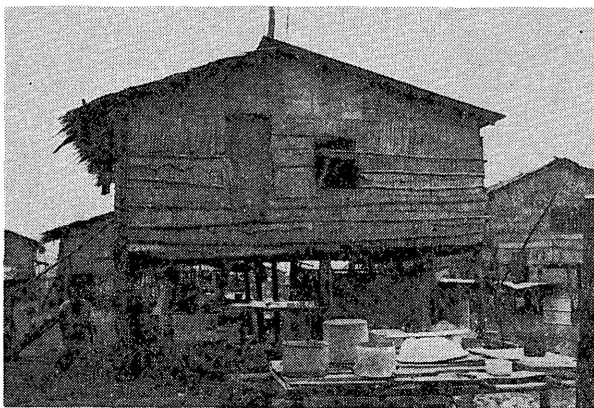


写真16 コナの高床民家と食器棚 (マダメ・コナ)



写真17 低い床の民家（一時的な住居に多い）（セヴェリマブ・コナ）

ago, マンガラで age)。地中 0.9~1.2 m の掘立てである。梯子 (toto) (ティリオで emega, ワブダで wakara) もマングローブ樹を用いたものが多い。

高床の場合、床下の空間は未利用のところもあるが、パタパタとよぶ台を設けたものが多く、ドラム缶を半割りにした移動式カマド（モモゴ）を置いて炊事するなど、台所、食堂として利用する例が多い。床下に風除けを作って寝室としたり、サゴ澱粉などの物置き（収納空間）に活用している家もある。

パプア・ニューギニア南西岸は、Haddon 隊の調査時では、素朴な地床住居と高床住居があり、高床住居が主流になりつつあった。

#### 4・4 高床式、地床式の分布

東南アジアやオセアニア（とくにメラネシア）地域の高床式、地床式の分布を巨視



写真18 高床下の利用（食事場や寝室にする家もある）（カタタイ・コナ）

的に検討すると、東南アジアの平野地域（ベトナム族居住地域を除く）からニューギニア海岸部、トレス海峡諸島、ソロモン、ビスマーク諸島の一部などに分布している。ミクロネシアやポリネシアにも分布しているが、新しい洋風住宅や集会所、倉庫など付属建物にみられる。

地床式は、東南アジアではインドシナ半島山地部、ベトナム族居住地域に著しい。ジャワ中部以東、バリ島、ロンボク島（土壇上）[石川 1968: 5-57]、モルッカ諸島のブル島、ハルマヘラ島の一部 [石毛 1978: 183-192]、トレス海峡諸島、ニューギニア山地部などに分布している。

中国人の居住様式は地床式である。ベトナムやインドシナ半島北部山地民の地床式は中国文化の影響とみられる。東南アジアに住む中国人の住居も地床式である。地床式は湿度の高い熱帯の居住環境には不適である。しかしこれを維持しようとする民族の慣習は非常に根強い。

ジャワの場合、インド文化（ヒンズー文化）との関連が考えられる。ニューギニアやトレス海峡諸島の地床式については、古い文化層に属するものか、オーストラリア大陸のアボリジンの素朴な地床式の伝播なのか、未解決である。

高床住居は J. Lehmann によって世界の分布が調べられている [LEHMANN 1904]。付属建物まで含めると、高床住居はシベリア諸族や、ヨーロッパにもみられるが、数

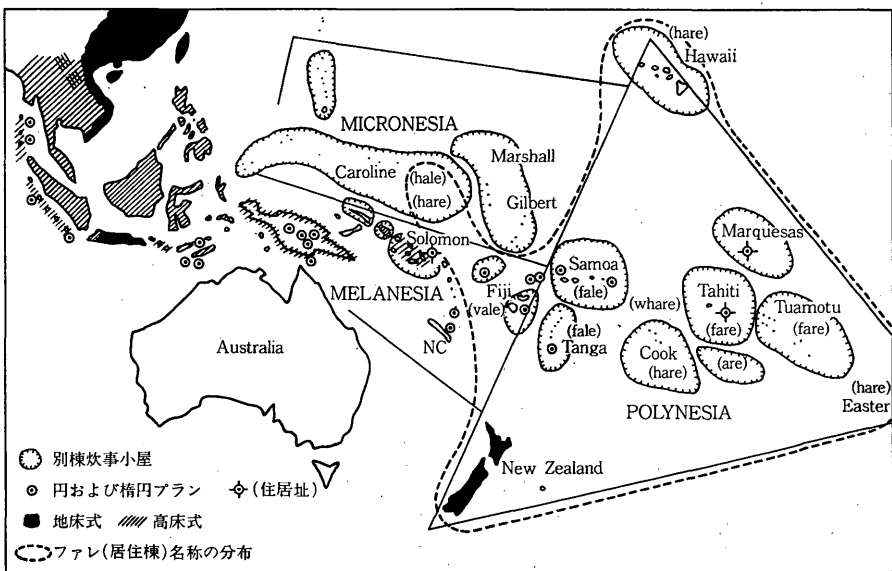


図14 高床・地床式民家、円・楕円プラン民家、別棟炊事小屋分布図

量的には東南アジアからメラネシアの島々の一部に多い。東アジアでは日本(半高床)が入る。

東南アジアやメラネシアの島々の一部に高床住居をもたらしたものは、ハイネ・ゲルデルンによれば、オーストロネシア諸族だったろうと考えられている [HEINE-GELDERN 1923: 689-968]。

パプア・ニューギニア海岸部の高床住居も、この大きな文化の流れとして考えることができるだろう。19世紀末頃からトレス海峡諸島に高床住居をもたらしたのものとしては、パプア・ニューギニア海岸や南海(メラネシア、ポリネシア)からの影響、宣教師らによる新様式の導入などが考えられる。

なお高床の起源に関しては、平地起源、山地起源、それぞれの地域に独自に発達した三つが考えられており、従来は平地起源の高床が山地へも拡大したとする説が多かった。しかしインドシナ半島山地民族の高床式の場合、山間部の傾斜地では立地上当然半高床式が生じ、これが高床式に移行したことが考えられる。しかもインドシナ半島における山地民の生活形態が、焼畑から定着化を強める過程で生成したことなどから、生活領域あるいは民族の移動が山地から平地へ流れるという大きなコースを考えれば、この山地起源説 [岩田 1966: 69-81] も十分な説得力をもつものと思われる。このようにみえてくると、これら諸民族が、自然に適応しながら島伝いに高床住居を拡散させていったという推測も可能になってくる。

#### 4・5 円形住居の分布をめぐって

現在のトレス海峡地域では、住居の平面型は、方形、矩形が大部分を占める。19世紀末にはトレス海峡東部諸島のマリー島、ダーンリィ島に円形平面の住居があった。中心柱のあるドーム状の草葺屋根で、屋内は土間部分と一部に低い床があった。かつては東部諸島の優占型であったと推察している [WILKIN and HADDON 1912: 93-119]。

オーストラリア大陸のアボリジンの素朴な円形平面の住居とのつながりも考えられるが、Haddonらは両者の関連には否定的である。東部諸島はミリアム語の分布地帯であり、Miriam round house と名付けている。

東南アジアでは、地床式円形住居はチモール島西部山岳地域とアンダマン諸島にみられ、屋根形式も円錐形に近い。チモール島では高床式円形住居もみられ、高床式楕円形住居も混在している [BROEK and WEBB 1968: 362-364]。高床式円形住居は、ニコバル諸島やスマトラ西南沖のエンガノ島、フロレス島西部のマンガレイ族、高床

式楕円形のものにはニアス島にも分布している [ROBEQUAIN 1966]。

ハイネ・ゲルデルンは、この円形住居（とくに地床式）を東南アジア最古の文化層の遺物と考えている。

分布を検討すると、アンダマン、ニコバル、ニアス、エンガノ、フロレス、チモールから、メラネシアのトレス海峡東部諸島（現在消滅）へ連なる。メラネシアではニューギニア山地部各地に円形、楕円形住居が分布し、ニューアイルランド島、アドミラルティ諸島、サンタクルーズ諸島、ニューカレドニアとその属島などメラネシアとポリネシアの境界付近の島々に散在している [TISCHNER 1934]。

ポリネシアでは、西部のサモア、トンガ、フナ、ウベアなどに円形、楕円形住居（地床、石壇）の分布が著しい。タヒチにも伝統的住居に円形平面のものがあつた。近年の考古学的発掘の結果、マーケサスやソロモン諸島にもみられ、過去には円形、楕円形平面の住居は広く分布していたことが明らかになってきた。

ドイツの民族学者 E. Werth は、円形および四角形の家について、従来のあまりにも狭い小地域内での考察を批判し、世界的な視野で論じている [WERTH 1954: 245-259]。Werth は、新石器時代以来ヨーロッパに農耕文化が入ってからは、それ以前の円形の家が四角形の家に変化していったことを明らかにし、狩猟社会から農耕社会へ移行するにつれて、円形・楕円形の家が四角形になっていったという一般的方向を示している。四角形（方形、矩形）のプランを農耕文化のタイプとすれば、東南アジアやオセアニアの島々、東アジアの大部分の地域はそのタイプに該当する。

円形平面を狩猟社会と結びつける点では、ポリネシア西部やニューギニア山地部、東南アジアの島々に分布する円形平面の住居に関しては、いずれも農耕民が多いだけに問題が残る。

日本では、縄文、弥生期の住居跡には巨視的にみて円形、楕円形、方形プランが混在している。これが古代になると円形、楕円形は激減し、四角形に変化していく。

世界的には、円形平面は狩猟・採集などの民族にみられる場合もある。モンゴルのゲル、中央アジアの天幕など遊牧民の住居にも円形平面がみられる。円形平面や楕円形平面をもつ住居については、アフリカでもフロベニウスらによって早くから指摘され [FROBENIUS 1894]、近年タンザニア、カメルーンなど各地の分布や構造、住まいかたが明らかにされつつある。南米アマゾン地域における円形大家屋についても興味深い報告がある [GUIDONI 1978]。

世界の円形、楕円形平面の住居は、平面型は類似していても、その屋根構造（小屋組）はかなり多様である。諸民族の慣習や移動など多くの要因を含んでいるから、

Werth のような経済発達段階のみによる分類では不充分である。

#### 4・6 間取型と住まいかた

##### 4・6・1 トレス海峡諸島

19世紀末のトレス海峡諸島の住居は方形の地床式、高床式住居にせよ、円形住居にせよ、すべて1室型で、室分化はみられなかった。炉は地床式や一部床張りの場合は屋内の土間部分に位置していた。現在、(1979年) スー島に残る伝統的住居9棟はいずれも地床式で、全戸1室型である。砂地の床にパンダナスの葉を編んだマット(waku)を敷いて生活している。いずれも別棟の炊事小屋をもっているのも特徴である(図13)。炉は薪ストーブだったが、現在ではほとんどガスレンジを持っている。

なお、スー島では、1戸のみビニールを張って2部分にするなど室分化の傾向がみられる。

トレス海峡の島々では北クインズランド型とよばれる洋風熱帯住宅が普及し、伝統的な住居はここ数年の間にほとんど姿を消したが、僅かに残る古い形式も、例えばスー島の場合、9棟のうち2棟は連邦政府資金の住宅を建設中だし、他にも一時的な仮住居的なものがあるから、消滅は時間の問題だろう。

オーストラリアのクインズランド州北部は熱帯地域であり、雨除け、日除けや室内気温の調節上ベランダをもつ住宅が多い。3面にベランダをもつものが多く、北部クインズランドのサンプル調査では62%を占めている [SUMNER 1974a: 17-24]。

1920年代初期の北部クインズランドの代表的家屋型は、トタン葺のピラミッド型屋根、高床で3面にベランダがあり、そこには欄干あるいは一部に格子状の目かくしをつけ、寝室2~3、居間、食堂をもち、炊事場は分離しているか、主屋の背後に設けていた。木曜島にも類似のタイプがみられるが、木曜島ではかなり経済的に上層の住宅に多く、現在では古い型である。ベランダ部分を居住空間とし、広い窓をもつ型が14みとめられる(1975年)。これらのうち、ベランダの屋根が緩やかなカーブを描く型があるが、1900~1910年頃に流行したものという。木曜島には3例残っている。

炊事場を別棟にした古い型は3例あるが、多くの家は主屋内にとりこんでいる。概して背後の位置のベランダ部分、下屋部分に配置しているものが多い。木曜島での最も単純な型は、1m前後の高床(low block)。寝室と居間が中心部を占め、炊事場、食堂とベランダがつく型で、これに浴室、洗濯場、天水タンクをもつもので、27例みとめられる。この型は1910~25年頃の流行型という。

家族数の増加にともなって、ベランダ部分を寝室にしたり、さらにベランダを後補



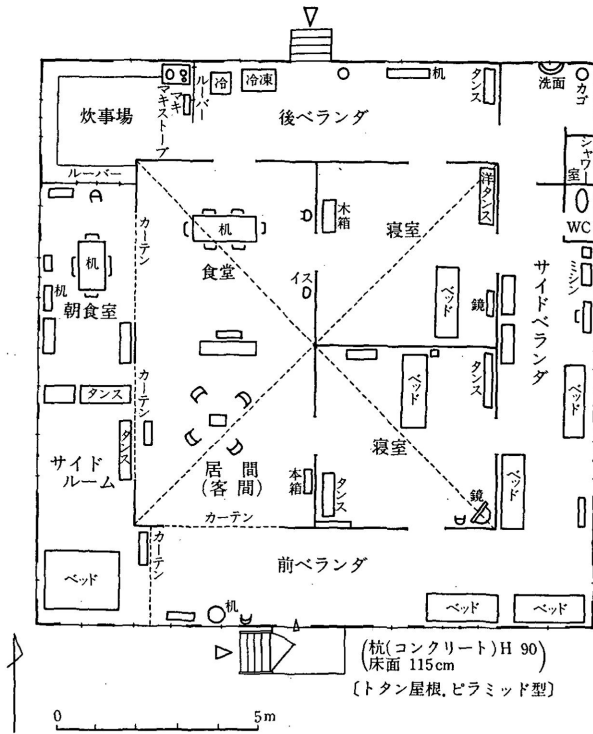


図15 木曜島の個人資金住宅(白人)

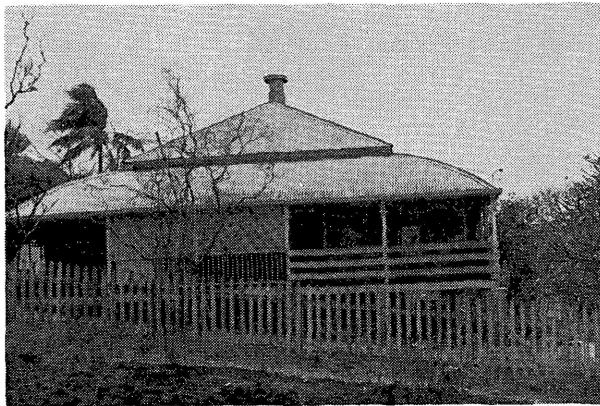


写真19 熱帯洋風住宅(ベランダ屋根が緩やかなカーブを描く, 1900-1910年頃の流行型)(木曜島)

して拡張している。現在は、トタン屋根で切妻型が多く、繊維質板の壁面で、3寝室、食堂、台所と居間、浴室、便所とベランダ付の高床式の住宅が多い。州や連邦政府資金による住宅プランも類似の形態で、台所の位置によって2～3の型がある。

トレス海峡の他の島々でも、各家の屋内は美しく整頓され、机、椅子などの家具類、ラジオ、ラジオカセット、冷蔵庫(ガス)、ガスレンジなどがかなり普及している。各家で多少の差異はあるが、オーストラリア連邦政府や州政府による手厚い社会保障が、住生活など日常生活面にもおよんでいる。

#### 4・6・2 パプア・ニューギニア南西岸

19世紀末のパプア・ニューギニア南西岸の住居間取りは、ほとんど1室型であった。

現在ダルー・コナの住居間取りを、

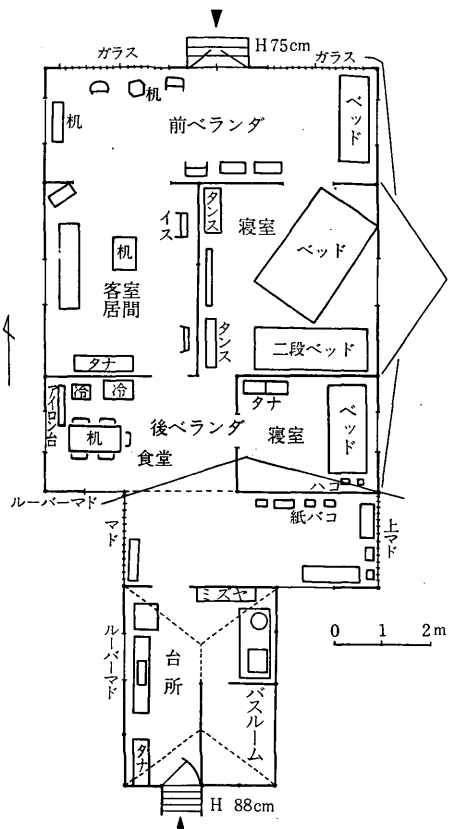


図16 木曜島洋風住宅(単純な間取り)

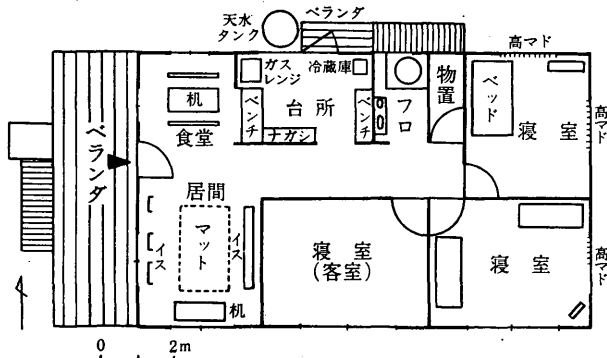


図17 オーストラリア連邦政府資金住宅間取り  
(ハモンド島の事例)

調査した主屋 15 事例についてみると、18.72 m<sup>2</sup> から 54.48 m<sup>2</sup> まで多様である。規模の小さな 2 例はいずれも 1 室型である。15 例のうち、2 寝室 + 1 居間（廊下、ベランダ）が 6 例で最も多く、ついで 3 寝室 + 1 居間と台所またはベランダ 3 例、4 寝室 + 1 居間 1 例、2 寝室 + 1 居間とベランダ、台所 1 例、2 寝室 1 例、1 寝室又は居間 2 例、6 寝室 1 廊下 1 例（擬似ロングハウス）となる。平均床高 1.3 m の高床住居である。

セペ、ボゼ、セヴェリマブ、3 コナの調査資料（1979年）によって室数をみると、1 室型が 13 例で最も多く、ついで 2 室 1 ベランダが 7 例、3 室 1 ベランダが 7 例と続く。1 室型が多いのは、セヴェリマブ・コナの新しい来住者の家に多く（8 例）みられるためである。

一般的には 2 寝室 1 居間（廊下やベランダの場合もあるが、この空間は機能分化の判然としない多機能空間の場合が多い）、3 寝室 1 居間が多い。パラマ No. 1、マバダウアンなど古いコナの住居では、規模も比較的大きく、室分化も進んで 4～5 室の事例もみられる。

6 寝室 1 ベランダは、ティリオ・コナの小型（擬似）ロングハウスで、6 家族が居住している。各家族の来住年次は、1970年 1、71年 1、72年 2、76年 1、78年 1 である。構造をみても、はじめからロングハウスではなく、増設が明らかである。キワイ島などにあったロングハウスとは形態も異なっているし、新築するまでの一時的な住居であるという。本村でもロングハウスがかつて若干あったが、現在では一家族一家庭である。

パパア・ニューギニア南西岸のカダワでは、2 寝室と 1 廊下（ベランダ、居間としても使う）が多く、マワタでも 2 寝室（moto-niro）と廊下（ベランダ、aeta）[松本 1980: 133-183] からなる間取りが多い。

各家では廊下（ベランダ、居間にも使う例あり）、寝室、居間、台所と炊事用の

表3 三村落室数

	1 室	1 室 + ベランダ*	2 室	2 室 + ベランダ	3 室 + ベランダ	4 室 + ベランダ	不明	計
セペ・コナ	2	1	1	5	4	2	1	16
ボゼ・コナ	1	0	1	2	1	0	0	5
セヴェリマブ・コナ	10	2	0	0	2	1	0	15

\* ベランダ（廊下、居間にも使う家が多い）

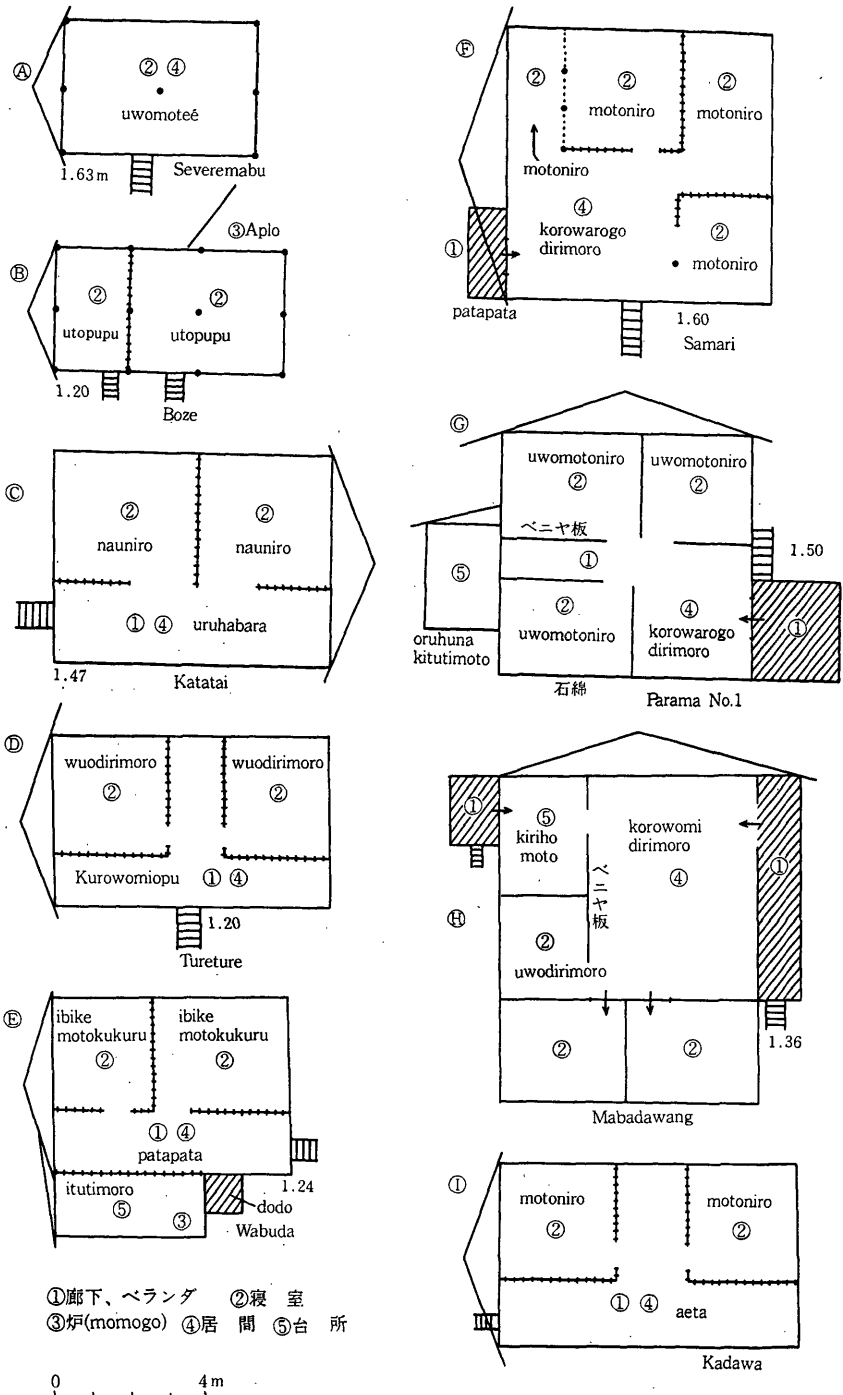


図18 ダルー・コナ民家間取り

炉（ドラムカンの半割りにしたものに土を入れ、鉄棒を渡したものが多く、モモゴ momogo という）などの配置は、家によって多様である。

ベランダは、ぬれ縁的に梯子を登った部分にとりつけられるものと、室内の廊下にあたる部分をさすものがある。前者は室分化の進んだパラマ No. 1, マバダウアン, サマリなど比較的古いコナの住居にみられる。後者は屋内廊下にあたる（ベランダ）部分で、梯子を登り、廊下（ベランダ）を通過して各部屋に入る。だから戸外から直接各部屋へは入れない。この廊下（ベランダ）にあたる空間は、家によって幅も異なるし、居間的な利用をする例も多い。前述したように、機能分化が進んでいない空間である。

この屋内廊下（ベランダ）のない家は、必ず屋外に小ベランダがあり、入口を入ったところがかかなり広い居間となっている。居住空間が整備されているものは古く形成されたコナの住居に多い。

各部屋の仕切りはニッパヤシ壁が多い。例えば棟高 3.1 m のうち 1.65 m までニッパヤシの壁で上は空いている簡素なものが大半を占めている。古いコナの住居では板を用いる例もある。1室形式から室分化し、整っていく過程をみるようである(図18)。

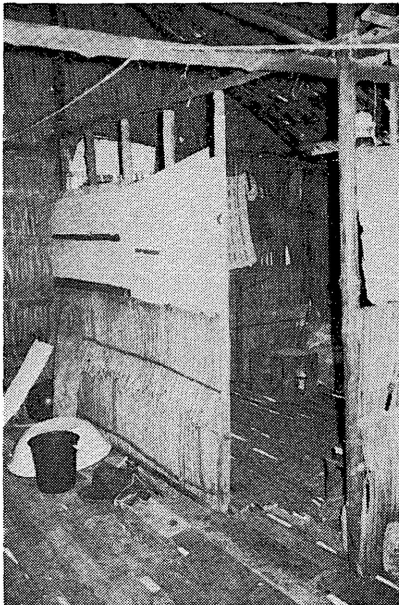


写真20 簡単な間仕切り（ニッパヤシやトタンなど混ぜて使っている。廊下と2寝室の標準型）（ワブダ・コナ）

高床住居だから、床下の利用も注目してよい。

パタパタとよぶ台や机がおいてあり、食事場、物置（サゴ澱粉など）に利用している。家族の多い家では風除けを作って簡素な寝室を作っている。

寝室は、キワイ島のサマリ、セベや南西岸のマワタではモトニロ (moto-niro), パラマではウオモトニロ (uwomoto-niro), ワブタではイビケモトククル (ibike moto-kukuru), 内陸のボゼではウトププ (uto-pupu) など種々の名称がある。室名や家屋各部の名称は、本村の位置が、海岸（ダルー対岸）、フライ川畔、キワイなどデルタの島々、内陸部で微妙に異なっている。

セベ・コナの資料（表4）によると、家族人員と家屋室数はほとんど対応するが、

かなり過密居住の例もある。現在（1979年9月）22世帯（家族）あり、1棟に2家族以上で居住するものが3例ある。コナは人口変動が激しく、現在少人数でも急増する可能性がある。

セペ・コナは1956～7年頃、本村から最初の来住があったが、転出も多く、当初から居住している家族は3例のみである。1965年には14家族が来住していたが本村へ戻ったもの、首都ポートモレスビーへ転出したものなど変化が多い。1975年以降に来住した家族が8例もある。

表4 セペ・コナ一覧表

(1979.9)

世帯	クラン名	来住年	居住人員			居住世代	主 屋 間 取 り
			男	女	計		
1	Duwape	1976	3	4	7	3	2 BD+1 V
2	Mipari	1979	4	3	7	2	1 BD+1 V
3	(Ipsia 村)	1964	4	1	5	2	2 BD+1 V (1 BD)*
4	Gagaripasa	1964	5	4	9	3	
5	(Severemabu 村)	1973	1	1	2	1	
6	Gagaripasa	1968	2	4	6	2	
7	(Wederehiamu 村)	1970	3	2	5	2	4 BD+1 V (1 BD+1 V)*
8	//	1978	7	4	11	3	
9	//	1956	3	4	7	2	
10	Dudumabu	1960	3	4	7	2	3 BD+1 V
11	Gagaripasa	1958-9	1	2	3	2	3 BD+1 V
12	Dudumabu	1956	0	1	1	1	2 BD
13	Sokomabu	/	/	/	/	2	3 BD+1 V
14	Skokmabu	1979	1	1	2	1	1 BD
15	Sokomabu	1970	3	3	6	2	2 BD+1 V
16	(Keremaf 村)	1971	2	3	5	2	2 BD+1 V
17	Sokomabu	/	/	/	/	/	2 BD+1 V
18	Sokomabu	1977	3	4	7	2	4 BD+1 V
19	Sokomabu	1957	1	1	2	2	
20	Sokomabu	1979	4	2	6	2	1 BD
21	Gagaripasa	1975	1	2	3	2	/
22	(Lewaru 村)	1979	9	9	18	3	3 BD+1 V

[BD(寝室, 又は居間), V(ベランダ, 廊下, 居間)]

[\*( )は別棟の小屋でも寝ている場合]

セベ・コナの場合、セベ本村以外の村から来住したものが7家族あるが、セベ村の家族と何らかの血縁関係をもつ例が多い。コナは定住的でなく、居住者の変動が激しいが、各コナの家屋景観が雑然としているのも、その反映とみることができる。

家族構成と住まいかたをみると、セベ・コナの場合2世代(14)、3世代(4)、1世代(3)、不明(1)。過半は2世代である。

夫婦、夫婦と子供(幼児)、未婚の男子、未婚の女子などは、それぞれ寝室を別にしているが、廊下(ベランダ)を寝室として利用することもある。

2~3家族同居の場合は、部屋別になり、高床下の空間を活用したり、別棟に小屋を建てるなど種々の方策をとっている。

**事例1** セヴェリマブ・コナ A家。屋根、壁面共ニッパヤシ葺き、3.6×5.2mの規模。1室型でウオモテエ(uwomotée)という。低いベッド1、カバン2、木箱1、ミシン1、ランプ1が家具。床(カウテ kaute)は板だが不揃いで不安定。パンダナスを編んだマットを一部に敷いている。床高は1.6mでかなり高い。床下は2×1.8mの台(パタパタ)と机があり、食事場になっている。窓は奥に1つある。セヴェリマブ・コナでは高床(アボモト abomoto)と低床

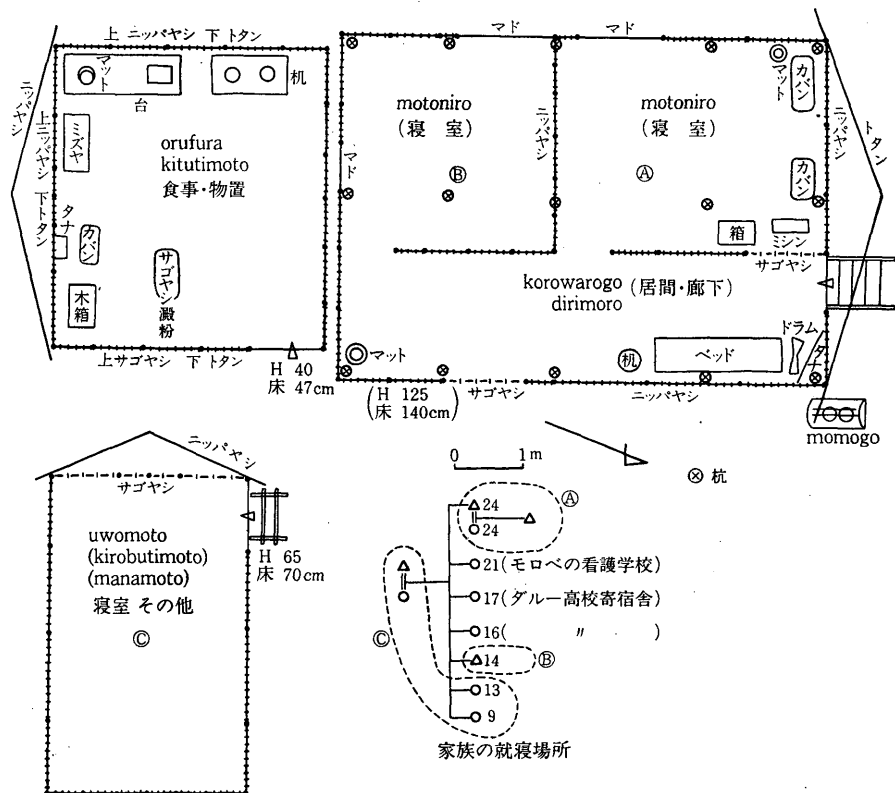


図19 セベ・コナ(ダルー)民家間取り

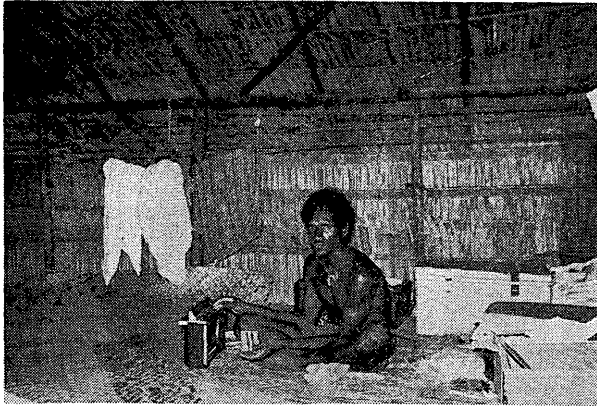


写真21 付属の小屋などは大部分1室型（寝室に使っている）（セベ・コナ）

の一時的な小屋ガラティモト (garatimoto) の区分があり、15戸中9戸がガラティモトである。

事例2 セベ・コナ A家。主屋の屋根は切妻トタン葺きだが、壁面はニッパヤシ（ウェリ weri）を編んだものと一部にサゴヤシを使う。1.4 mの高床式。規模は4.8×6.8 m。間取りは寝室2と居間1（廊下にあたる）。部屋の間仕切りは棟高3.1 mのうち1.8 mまでニッパヤシ壁で上は空いている簡素なものである。窓は2面に3つあり木の開閉式（上下）。床下は未利用でサゴ澱粉などがおいてある程度。各部屋にパンダナスを編んだマット (waku) を敷く。低いベッド1、ドラム1、机1、カバン2、箱1、ミシン1が主屋にあった家具類である（図19）。

主屋に隣接して低床（47 cm）のニッパヤシ葺小屋がある。食事兼物置でミズヤ、木箱1、机1、カバン1、棚にマット、ナベ類、ランプなどが置いてある。炉（momogo）は主屋入口近い屋外においてある。小屋の隣りにニッパヤシとサゴヤシを使った床高70 cm、1室間取りの小屋があ

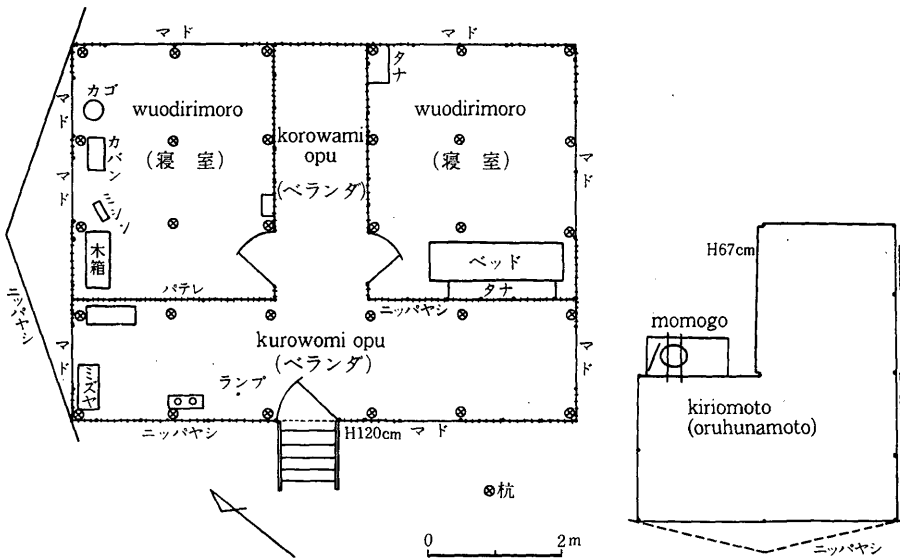


図20 ツレツレ・コナの民家（ダルー）



る(写真21)。家族の就寝場所は、長男夫婦と幼児、少年がそれぞれ主屋の寝室を使い、両親と年少の子供は別棟の小屋を使っている。子供のうち3人は看護学校や高校の寄宿舎にいますが、帰宅した時は寝室③または居間(廊下)を使う。

**事例3** ツレツレ・コナ K家、ニッパヤシ葺の屋根と壁面、7.5×5.6mの規模、高さ1.2mの高床式。間取りは2寝室1廊下で、2寝室の間に廊下がはさまっている。事例2と共に標準型といえる。居間兼用空間。窓は四面にあり、木製上下開閉式。廊下はミズヤ2、コンロ1、ランプ1、寝室に木箱1、ミシン1、カゴ1、カバン1、低いベッド1、棚が3カ所にある。間仕切りはニッパヤシとパンダナス編みのものを使う。床下は利用しないが、別棟の炊事兼食事、居間にも使う小屋がある(図20)。

**事例4** パラマ No. 1。屋根はトタン葺切妻型、トタン壁で1.5mの高床住居。6.5×6.5mの四角い家だが、台所と露天のベランダがつく。間取りは3寝室と1居間+台所で、梯子をのぼったところ(入口)に2.2×2.5mのベランダ(パタパタ)がある。部屋の仕切りはベニヤ板を使っている。窓は四面にあり、ガラス開閉式(ルーバー窓)である。パラマ No. 1は古いコナで、市街地に近く、家屋も市街地の洋風住宅に類似している。各寝室はパンダナス製マットが敷いてあり、ベッド1、ミシン1、カバン2、紙箱1、ドラム1と家具は簡素である。主屋の床下は一部に低床の台があり、机と椅子があって食事場に使っている。10人家族である。別棟の小屋(オルフナモト oruhunamoto)は73cmの高床小屋で、机、ココヤシ削りが置いてある。物置き作業場だが寝室にも使う。トタン屋根の差掛け屋根の小屋は炊事場で炉(モモゴ)がある。

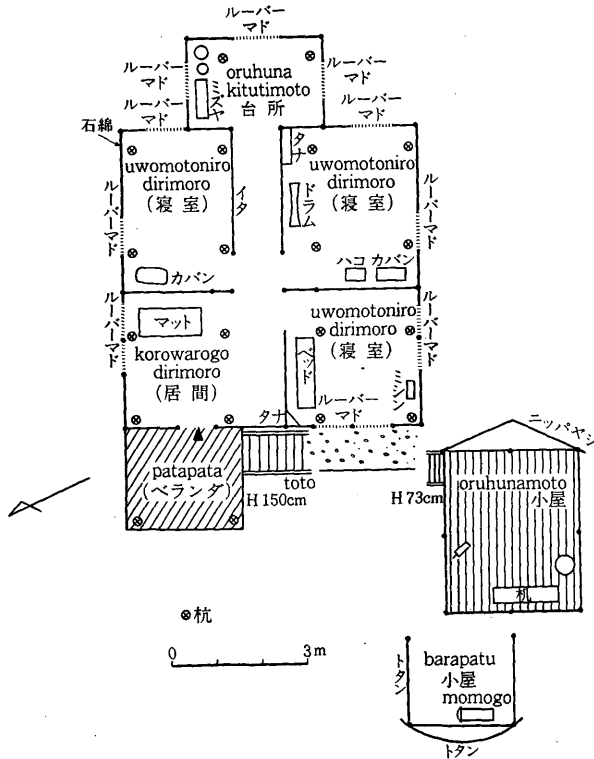


図21 パラマ No. 1. コナの民家間取図

## 4・7 付 属 建 物

### 4・7・1 トレス海峡諸島

19世紀末の Haddon 隊の調査では、トレス海峡諸島の主屋以外の建物として、地床式の素朴な小屋類が記載されている。西部諸島には、独身男性用の kwikwi-iut (高床式、ヘッドハウス。ロングハウスに類似) や kwod があった [WILKIN and HADDON 1912: 93-119]。

現在のトレス海峡諸島の住宅は、洋風熱帯住宅が普及しており、屋敷もよく整備してある。屋敷の境界はココヤシやアーモンド、ワンガイ (野生のスモモ) など樹木の見通し線を用いているものが多い。屋敷内には樹木が多く、絶好の木蔭を作っている例もある。

主屋の他に炊事棟、水浴場、洗濯場、食器棚、倉庫、便所、天水タンクなどがセットになっている例が多い。

炊事場は洋風住宅の場合、主屋内に位置するものが多い。炉は古い民家では主屋内の土間にあったが、炉ではなく、床上で使える薪ストーブ、現在ではガスレンジも普

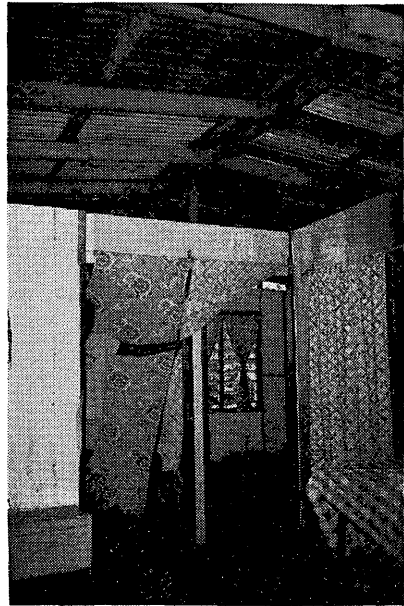


写真22 古いコナの民家 (ルーバー窓をもち部屋数も多くなる) (パラマ No. 1 コナ)



写真23 食器棚、水浴場 (洗濯場) (スー島)

及しつつある。

スー島などに残っている伝統的住居の場合、炊事場は別棟になっている。

洗濯場は簡単なココヤシ壁で囲んだものから(スー島など)、片流れのトタン屋根やコンクリート床と貯水槽をもつもの(木曜島、ハモンド島など)など各種ある。

連邦資金住宅など high block の家では床下に洗濯場を設けている例が多い。便所は1m四方の箱型のものが多く、内部は木製腰掛式である。回転式洗濯干し場をもつ家もみられる。家畜小屋は、小規模な鶏小屋、豚小屋などがあるが数は少ない。

#### 4・7・2 パプア・ニューギニア南西岸

パプア・ニューギニア南西岸のマワタでは主屋以外に、物置兼作業小屋 (sobomoto)、炊事小屋 (sobomoto)、ココヤシの葉で囲んだ水浴小屋 (kuwa-moto)、便所、数は少ないが豚小屋、鶏小屋などの付属建物がある。家によって不揃いで必ずしもセットになっていない [松本 1980: 133-183]。

ダルー・コナでは、各コナによって名称に微妙な差がある。炊事小屋(ドラムカン半割り屋根または片流れ、差掛け屋根など)、食堂兼仕事場あるいは寝室に使う小屋をもつ家が多い。他に食器などを置く棚、鶏小屋(竹または細い木で作る)、便所などがあるが、必ずしも各家に揃っているのではない。モモゴ (momogo) とよぶ移動可能な炉(ドラムカン半割りに土を入れ鉄棒を渡したもの)を小屋の中に入れたものもあるが、戸外あるいは床下において調理する例も多い。マバダウアンのような古いコナの家では、室分化が進み、食堂 (kirihomoto/kitutimoto) をもつものもある。しかし炊事は戸外の炉(モモゴ)で行うことが多い。

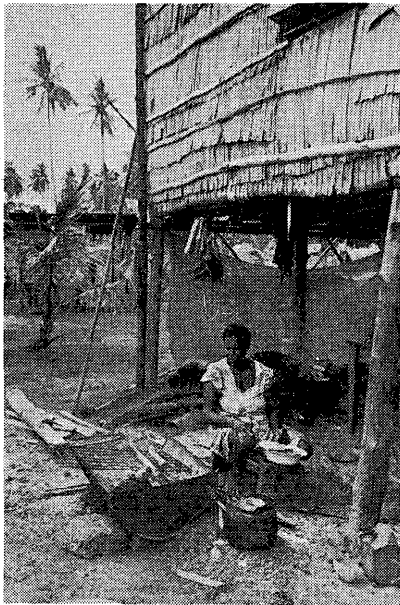


写真24 炊事場(高床下に簡単なドラム缶半割りに土を敷いた炉をおく)(マダメ・コナ)

居住棟である主屋と炊事棟を別棟にする形式は、わが国でも僅かだが南西諸島に事例があり、二棟造りとよんでいる。建物は分離せず相接していても屋根は別棟になっているものや、差掛け屋根の炊事場まで加えると、この形式は東南アジアからオセアニアにかけてかなり広範に分布している。

炊事小屋を別棟にする形式は東南アジアにもみられるが、オセアニアのポリネシアとミクロネシアに濃厚に分布している。トレス海峡地域でも古い形式は炊事場を別棟あるいは戸外で炊事する傾向が強い。

この別棟形式は、熱帯、亜熱帯地域において、炊事場を分離して暑気をさけたことや、建築技術の問題なども大きな要因と考えられる。しかし火をめぐる問題は、諸民族の習俗から生まれたものであり、環境や家政学的見地からのみの解明では不十分であろう。

#### 4・8 ロングハウスをめぐる

トレス海峡地域では、1家屋に1家族が居住している場合が多い。多数の家族が集って1棟の大家屋、いわゆるロングハウスの中で生活している例は、東南アジアやパプア・ニューギニアのフライ川河口のキワイ島、セピック地方の一部、西イリアンのヘルフィンク湾など各地に散在している。そのうち、東南アジアのボルネオ島には現在でもロングハウスの分布があり、建築構造上も、居住の面からも種々の特徴を持っているので、すでに諸先学によって研究が行われている [FREEMAN 1955: 1-21; GEDDES 1954; 佐々木 1970: 135-141; TOKYO INSTITUTE of TECHNOLOGY 1977; 高山 1979: 200-214; 関根 1979: 54-107]。なお、直接ロングハウスを扱ったものではないが、G. Domenig の研究が注目される [DOMENIG 1980]。

##### 4・8・1 キワイ島のロングハウス

——ハaddon隊とラントマンの調査資料を中心に——

トレス海峡地域では、フライ川河口のキワイ島のロングハウスが、19世紀末のHaddon 隊の調査報告や20世紀初期のLandtman の民族誌に詳しく記載されている。この報告の中にも、大型のロングハウスは次第に少なくなり、数家族だけを収容する小型の住居が増えていることを指摘している。現在はほとんど個別家屋に代ってしまった。ただフライ川デルタ地帯に隣接するゴゴダラ (Gogodala) 地方にはロングハウスが僅かに残されている。

Haddon 隊の報告やLandtman の民族誌 [LANDTMAN 1927: 4-22] によってキワイ島のロングハウスの特色を展望してみよう。

キワイ地域のロングハウスには、(1)主に女性や子供が住む共同生活住居 (communal dwelling house, móto) と、(2)男の家 (men's house, dárímo) の2種類がある。

共同生活住居は高さ1.8~2.0 m の杭上家屋 (高床式) で、杭の数は多い。

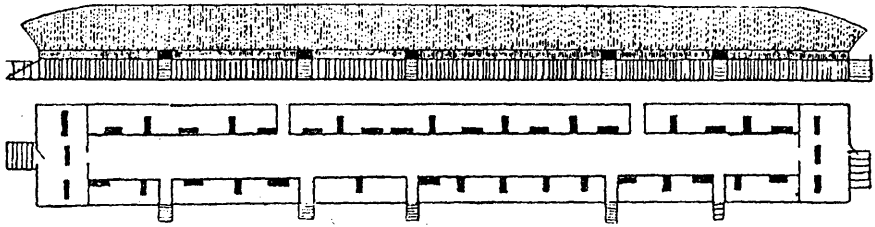
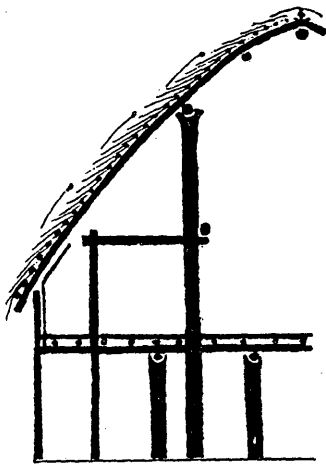


図22 ㊸ キワイ島イアサの Soko-korobe clan のロングハウス  
[WILKIN and HADDON 1912: 112]



㊹ キワイ・ロングハウスの断面  
[WILKIN and HADDON 1912:  
113]

ロングハウスの規模は多様だが、オロモサプオには全長 154 m のものがあった。非常に長大な家をもつことは村やクランの誇りであった。建物の各部分はすべて籐で結んでいる。

重要な柱（垂直材）（sāro または nāro）は 4 列に並び小屋を支えている。床材料には特定のヤシが使われており、質が密で弾力性がある。2 つの重要な入口は切妻の両側にあり、一方の切妻はブッシュの切妻、他方は海岸の切妻とよんでいる。屋内で行われる儀式や踊りの時は、これにたずさわる人々はいつもブッシュの切妻側から入り、海岸の入口は死者の地アディリ (adiri) の方向を象徴しているという。屋根はニッパヤシ葺きである。

ニッパヤシの葉片を二つに折り、同じ葉の中央の折れ目から切りはなした中肋をピンとして編む。これを重ねて葺きあげる。

屋根は僅かにアーチ状となり、高床の杭の上 60 cm 以内まで葺きおろしている。

ロングハウスの内部は、中央に通路 (motogábo) があり、両側の床には粘土を敷いた炉 (momógu) が並んでいる。

窓がなく、屋内は炉の煙でいぶされるが、蚊を追払うのによいらしい。

各家族は個別に炉を所有していて、各世帯の者はそのまわりに居住する。各家族の部屋は完全なコンパートメントでなく、炉の上にある棚 (dódo) が仕切りの役割をはたしている。数戸のロングハウスではサゴヤシの中肋で作った仕切りをもつものもあるが、一般に屋内にははっきりした仕切りはない。

床にマット（パンダナスを編んだものなど）を敷き、その上で起居する。

切妻両側の出入口に加えて側面にも出入口がある。Haddon 隊の報告では、イア

サのロングハウス (85.5 m×9.6 m) は、両端に2、海岸側5、内陸側2、合計9の出入口がある。

男の家 (dárímo) のない村では、時に共同生活住居の一端または両端が区切られ、独身男性の住む個室 (táera) となる。個室のない場合、若い男性は共同生活住居の中で割りあてられた場所か、別の小屋で寝る。家の主要な部分はどちらか一端にあり、そのクランの指導者はそこで暮す。また、いずれの側面でも住居の中心にある部屋は名誉を伴うとみなされている。

男の家 (dárímo) は共同生活住居と構造は類似しているが機能が異なる。男の中でも特に独身男性が男の家 (dárímo) で暮す。既婚男性はよく共同生活住居で寝る。男の家 (dárímo) 本来の機能は儀式用である。各男の家 (dárímo) にかかわっている老女以外、女性と子供は一定の踊りがおこなわれる時だけ男の家に入ることができる。

各共同生活住居には単一のトーテム・クランが暮しているが、時には2～3のクランが同一ロングハウス内で別々の場所に別れて居住している例がある。

男の家の建築は村の全住民が参加する作業である。数々の慣行があるため、経験豊かな老人が指揮をとる。とくに悪の影響を遠ざけ、儀礼を営む畏敬の念をおこさせる家にするため、終始呪術を伴う。男の家 (dárímo) の建築にあたっては、家の中央右側に彫刻を施した大柱を立てることも重要な行事だし、成人男子達が柱をかかえ、在来の敵が住む村の方に向かって立つようにまわす。屋根が完成すると炉をすえる。建造を指揮する老夫婦が、木片に突き通すか、こすりつけるかして、中央の柱の前にある最も主要な炉床に火をたきつける。その火は新しくおこさねばならない。

各トーテム・クランには、男の家の一定区画が割りあてられ、その区画内の柱は何本でも、そのクランのもののみなされる。建築の諸段階で人々は敵を何人か殺し、家の一定の部分にその血をなすりつけるということである。その他、建築過程で種々の呪術が行われる。そして実在する2人の創造者 (老夫婦) の生命を犠牲にして男の家は完成する。

ラントマンの調査時 (1910年) には、すでにこれらの諸慣習はほとんど行われていなかったが、彼は男の家の神聖な儀式の場としての意義として、次の2点をあげている。

(1)男の家 dárímo は、戦に導く不断の刺激を象徴していたこと。(2)家の建築に呪術を使うことは住人の福利に欠かせない。

万一、新しい家で病気がおこると、建築中の手落ちが原因とされ、完成したばかりの家を取り壊し、新たに建てることもあった。このことは呪術を正しく行うことがい

かに重要かを示している。

ダルー・コナでの村人の話を総合すると、それぞれの本村には僅かだが1930年代頃まで、ロングハウスが残っていたらしい。例えばセペ・コナの場合、本村のキワイ島セペ村には20以上ロングハウスがあった(必ずしも長大なものばかりではない)。そしてクランごとに別々のロングハウスに住んでいた。戦後は政府の指導などもあり、急速に減少していったという。

#### 4・8・2 ロングハウスの分布をめぐって

パプア・ニューギニアでは、フライ川河口のキワイ島をはじめ、フライ川畔にもかつてロングハウスが存在した。ゴゴダラ地方のバリモからアラミア川を遡江したイサゴ村 (Isago) には、現在でも長さ 120 m の共同家屋が一つだけ残っている。その他セピック地方の一部や、西イリアンのヘールフィンク湾などにも大家屋に多数の家族が住む例があった。

東南アジア地域についてみると、インドシナ半島ではビルマのカチン族 (Kachin) が 0.9~1.2 m の高床、30 m のロングハウスで、壁面、内部の仕切りは竹が多く使われる。カレン族 (Karen) の場合、伝統的には20~30の家族からなるロングハウスがあったが、現在はほとんどみられない。ベトナム南部のアンナン山地のモン・クメール語系のセダン族 (Sedang) も、斜面に高床のロングハウスをもち、南部のマ族 (Ma) にもみられる。同じモン・クメール語系であるベトナム・カンボジア国境付近の山地に住むノン族 (Mnong) は、地床式のロングハウスだが、斜面では一方が高床になっているものがある。ラデ族 (Rhade) も高床のロングハウスである。マレー半島北部山間地域のセノイに属するテミール族 (Temiar) は小規模なロングハウスに住むが、近年減少している [杉本 1971: 147-191]。

島嶼部では、スマトラのカロ・バタックの慣習家屋が高床式で、内部は4・8・12の偶数の部屋の区分(ジャブ)があり、8つのジャブ(部屋)が一般的である [倉田 1975: 58-80]。

ボルネオには、ロングハウスの分布が顕著である。とくにサラワクの陸ダヤ族、イバン族 (Iban), カヤン族 (Kayan), ケンヤー族 (Kenyah) のものが建築上も大型のものである。サバでは、南部山地に住むムルット族 (Murut) が高床のロングハウスをもっているが、小規模なもので、近年減少している。ドゥスン族 (Dusun) のロングハウスはクダット (Kudat) に僅少分布するのみである。カリマント山間部にも散在するが、数量的にはサラワクに多い。ボルネオにおける主要民族別のロングハウスの特色を模式図にしたのが図23である。ここでは筆者の調査したサラワクのイバン

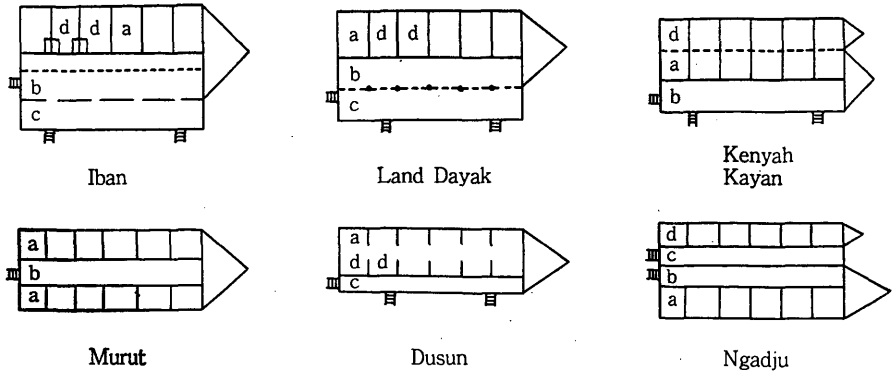


図23 ボルネオのロングハウスの諸タイプ(模式図)  
(a居室, b廊下, c台, d台所) Lee, Miles, 筆者の調査資料により作成

族のロングハウスをとりあげてみる。

東マレーシア, サラワク4区, パクット村。ミリから密林地帯に入ったシブチ川上流にあたる。煙をあげる焼畑や二次林もあり, 出作小屋もある。ラワン材搬出道路から少し入った密林のやや開けた所にある。長大なロングハウスと4戸の独立家屋が集落を作っている。

ロングハウスは, 長さ150m, 幅12m, 露台(tanju)を加えて17m。木材を豊富に使っている。屋根もベリアン(belian: *Eusideroxylon zwageri*)という硬い木の木片(柿茸)で葺いている。妻側はニッパヤシ(アタップ)と割竹を使う。

イバン族のロングハウスは, tanju(露台), ruai(廊下), bilek(家族の居室, 台



写真25 ロングハウスの長大な廊下(ルアイ)。右側奥に各室(ビレック)がある。(サラワク4区, パクット)



所), sadau (大きい屋根裏) の4部分から構成される。長屋前面に板を並べた tanju では洗濯物を干したりしている。ロングハウスの内部は、まず 6 m 幅の廊下 (ruai) があり、板と一部竹を使っている。ruai と tanju の間は板壁だが、上部は木組みの格子になっており通風をよくしている。廊下は共通の利用空間で、接客、作業場、通路である。来客の時は、ここに敷物を並べる。居室に近い部分は作業場である。この部分は各家族の所有空間だが、厳密さはない。廊下の端近い柱に罫腰が約10個竹籠に入れて吊るしてあるが、現在儀礼的な意味はない。廊下の奥は bilek とよぶ各家族の居室兼寝室で、この棟には 41 bilek (ロングハウス右端の 2 bilek は ruai が欠けるので厳密には 39 bilek)、41家族が住んでいる。

入口を入ったところに台所があり、炉をもつ。1室は 4×6 m である。イバン族の中にはロングハウスに接して別棟の台所 (dapor) をもつものもある。屋根裏は巨大で、sadau とよび、物置として利用する。ロングハウスの居住人員は、41家族256人、単独家屋4戸の14人を加えると270人。ロングハウスについては1家族平均6.2人となる。少数の例だが単独家屋の1戸平均3.5人に比べると多い。Freeman の調査 [FREEMAN

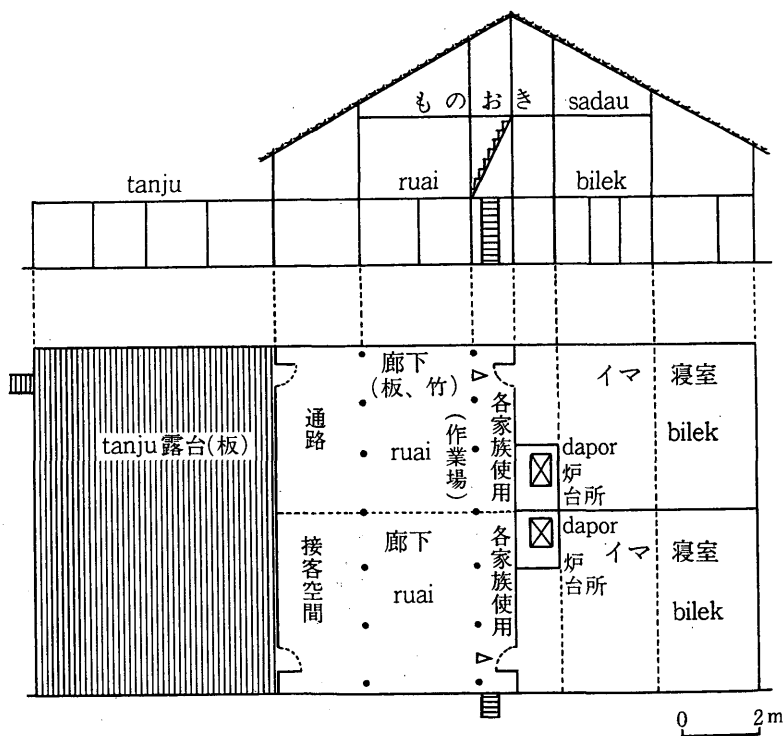


図24 ロングハウスの構造 (サラワク4区パケット)

1955] では、ロングハウスの多くは10~20個（平均約14個）の *bilek* によって構成され、1 *bilek* の平均人口5.75人、ロングハウス *community* の平均人口60~120人となっている。したがって、パケット・ロングハウスは相当規模の大きいものである。

キワイのロングハウスの場合、種々の規模がある。居住人員に関する資料はないが、Wilkin と Haddon の報告によれば [WILKIN and HADDON 1912: 93-119], 85.5 m × 9.6 m のロングハウスに36家族居住している例があり、1家族5人として180人余と推定している。

イバン族のロングハウス（パケット、1968年）では、*bilek* に住む各家族は、1世代（2）、2世代（32）、3世代（7）で、核家族を中心とした形態が多く（2家族が1 *bilek* に住む例は1）、直系3世代までの居住が多い。

陸ダヤ族 (Land Dayak) や Iban 族に関する諸研究によれば、ロングハウス居住者の婚姻後の居住は、夫方、妻方のいずれも自由に選べる原則 *utrolocal residence* をもち、財産の相続は *bilek* に留まる子供がすべて平等の権利をもつなど、その家族の居住、継承の原則には、双系的な社会構成原理が顕著であり、このような性格をもつ小家族のアパートメントの集合したものであることが明らかにされている。パケットのロングハウスでは、ほぼ中央に首長の *bilek* がある。ロングハウスの創設者の居室 (*bilek*) が中央部を占める傾向がありロングハウスの住人は創設者の親族によって作られるグループと双系的な親族関係によって結ばれたものが多い。また、Iban 族や陸ダヤ族のロングハウスは、親族関係をもつもの以外の移住者を含む例もみられる。しかしサラワクの諸族以外のロングハウスでは、クランに組織づけられた人々によって居住しているものが多い [LOEB and BROEK 1947: 414-425]。

カリマンタン（ボルネオのインドネシアの領域）のロングハウスは、バリト川上流部のンガジュ族 (Ngadju) などにみられるが、Miles の調査 [MILES 1964: 45-57] では、6家族からなるロングハウスで、各家族は2人の創設者のどちらかと血縁関係をもっている。創設者は、2つの大家族の首長であり、財産をもった有力者であった。移住者は別棟の単独家屋に住んでいる。

パプア・ニューギニアのキワイのロングハウス（現在消滅）では、クラン別にロングハウスに住み、男の家の内部もクランによる区画があるなど、クランとの結びつきが強力であった。

東南アジアに分布するロングハウスについては、雲南から南下し東南アジア島嶼部に伝播したとするみかたがある [LOEB and BROEK 1947: 414-425]。サバでは、ロングハウスの減少が著しい。これは、海賊行為による混乱からの防御がロングハウス

建設の要因であり、19世紀末～20世紀に平和の到来と共に、Dusun 族のロングハウスが消滅の道を歩みはじめたことが、これを証明するという [LEE 1965: 90]。サラワクについては、強力な政府が首狩りを廃止したことによって、村を防衛する手段としての共同家屋の必要性がなくなったとする説がある。これに対して Leach は、行政の影響の強い陸ダヤ族の地域でロングハウスが多いことから、この説に反論し [LEACH 1950: 68]、ロングハウスとマレー文化との関係を強調している。マレー人は独立家屋に住んでいるが、ボルネオの海岸地域のマレー人地域およびその周辺では、ロングハウスの分割傾向や、小型化はあるものの、まだロングハウスに固執しているようである。マレーシア政府による焼畑耕作民などの更生対策としての FLDA (Federal Land Development Authority) 農場の1例 (ミリ近郊、ツルク・アブドル・ラーマン農場) をみると、イバン族36家族が入植しているが、14室1棟と、22室1棟の新ロングハウスに住んでいる。単成家屋より住みやすい、慣習上単成家屋では不便だという。生活慣習は、経済生活が変化しても容易に変化しない1例であろう。しかし Iban 族の青年たちの中には、単成家屋に住むことを希望する者も多いのである。

パプア・ニューギニア、キワイのロングハウス消滅の背景については、行政による部族対立の減少や指導などが大きな要因として考えられる。ただ現在でもクラン的機能が村落生活面にも残っているだけに、ロングハウス消滅過程については未解明な面が多く残っている。

## 5. む す び

(1) トレス海峡地域の集落形態は、トレス海峡諸島におけるキリスト教の伝来、布教にともなう集落の再編成 (集住化→疎集村、列村状形態)。東部諸島の小村形態の残存 (その背景に種々の要因) が明らかになった。

パプア・ニューギニア南西岸の集落は、広場型集村形態を主とし、親族集団と集落形態とのかわりがかかなり濃厚である。メラネシア村落の特色をかかなり明瞭に示しているものが多い。ダルーに形成された各コナの場合、親族集団と集落形態との関係は各コナによって差異があるが、本村に比べるとかなり稀薄化しているものが多い。

(2) 住居については、Haddon 隊調査時 (19世紀末) に近代的住居として、高床住居 (杭上家居) や、床張り化、屋根と壁面の分離独立、窓のとりつけ等々をあげ、古い伝統的タイプと連続しない点を指摘している。19世紀末以降の変化については、各

構成要素別に考察したが、要約すれば、屋根型の変化（寄棟や素朴な切妻から切妻型の優占）、窓の増加、地床住居の減少（残像形態はある）、高床住居（杭上家屋）の増加、炉の屋外への移動、屋内床上での薪ストーブからガスレンジ（トレス海峡諸島）、軒高の増加、屋内室分化傾向（1室型から2～3室＋ベランダ：未分化空間→多室化へ）などを示すことができる。

(3) オーストラリア連邦、クインズランド州に属するトレス海峡諸島の場合、白人の進出以降、洋風熱帯住居の急速な普及があった。現在（1950年代から）連邦、州、ミッションによる新住宅の建設によって画一化に近い村落景観を現出しつつある。

パプア・ニューギニア南西岸の場合も、近年政府（N. H. C.）による新住宅の建設が開始されているが、全般に伝統的な居住様式が残存しており、トレス海峡諸島とは著しい差異を示している。

(4) 高床式と地床式、円形住居、ロングハウスについては、東西アジア、オセアニア（とくにメラネシア）地域との比較を試みた。そしていくつかの居住様式の流れを推察することができた。しかしメラネシア地域については資料の疎密がある。例えばニューギニアの場合、中央高地帯（山岳地域）に比べて、海岸部の調査資料が少ないし、資料の空白地帯が広大である。

筆者は先に東南アジアからオセアニア島嶼部（メラネシア、ポリネシア、ミクロネシア）に至る地域について、住居関係資料の分布を中心とした整理を行い【杉本 1971: 147-191】、広域の住居を比較研究する第1段階とした。今回のトレス海峡地域の住居研究は、空白地域を埋めて第2段階への進出を試みたが、充分とはいえない。

(5) 本研究では、住居の構成要素別の検討にかなり重点があった。今後、東南アジアからメラネシア、ポリネシア、ミクロネシアをふくめた広域について、住居型、集落型と社会組織相互の関連や、これに民族の思考様式とのかかわりまで加え、2～3の大地域類型の設定を考えることも必要である。それにしても、資料を可能な限り渉猟し、体系的に整理することは必須作業と考えられる。

## 謝 辞

トレス海峡地域の調査研究は、1975年以降3回にわたって行われたが、いずれも文部省科学研究費補助金によるものである。その間、隊長の藪内芳彦先生、大島襄二先生をはじめ、隊員の諸氏より種々御教示を頂いている。厚く御礼申し上げます。

多くの現地の人々の協力も忘れられない。木曜島などの在留邦人の方々にも大変お世話になった。記して感謝の意を表します。

文 献

- AUSTRALIAN BUREAU OF STATISTICS  
1974 *Queensland Pocket Year Book* 25.
- BROEK, J. O. M. and WEBB, J. W.  
1968 *A Geography of Mankind*. London: McGraw Hill, pp. 362-364.
- DOMENIG, G.  
1980 *Tektonik im Primitiven Dachbau*. ETH Zürich: Göttersitz und Menschenhaus.
- DUNCAN, H.  
1974 *Socio-Economic Conditions in the Torres Strait*. The Torres Strait Islanders, Vol. I, Canberra: Research School of Pacific Studies, Dept. of Economics, Australian National University, pp. 31-39.
- FREEMAN, J. D.  
1955 *Iban Agriculture, A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. Colonial Research Studies 18, London.
- FROBENIUS, H.  
1894 *Africanische bautypen*. München: Mondrion.
- GUIDONI, E.  
1978 *Primitive Architecture*. New York: Harry N. Abrams.
- GEDDES, W. R.  
1955 *The Land Dayaks of Sarawak*. Colonial Research Studies 14, London.
- HADDON, A. C.  
1932 *Head Hunters-Black, White, and Brown*. London: The Thinker's Library. (ハッドン A. C. 石川栄吉 (訳) 1969 『ボルネオ奥地探検』大陸書房。)
- 橋本征治  
1979 「トレス海峡諸島における文化変容の空間的側面」『人文地理』31(4) : 1-18.
- HEINE-GELDERN, R.  
1923 *Sudostasien*. Illustrierte Völkerkunde II, Stuttgart.
- 石川栄吉  
1968 「バリ島およびロンボク島の農民家族と居住様式」『バリ島の研究』東海大学, pp. 5-57。  
1970 『原始共同体——民族学的研究——』日本評論社。
- 石毛直道  
1978 「ハルマヘラ島, Galela 族の食生活」『国立民族学博物館研究報告』3(2) : 183-192.
- 岩田慶治  
1966 『日本文化のふるさと』角川書店。
- 倉田 勇  
1975 「カロ・パタック社会の家屋居住形態」『南方文化』2 : 58-80。
- LANDTMAN, G.  
1927 *The Kiwai Papuans of British New Guinea*. London: Macmillan.
- LEE, Y. L.  
1965 *North Borneo, A Study in Settlement Geography*. Singapore: Eastern University Press.
- LEHMANN, J.  
1904 *Die Pfahlbauten der Gegenwart, Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien XXXIV*.
- LOEB, E. M. and BROEK J. O. M.  
1947 *Social Organization and the Long House in Southeast Asia*. *American Anthropologist* 49 : 414-425.
- 松本博之  
1977 「マビオグの村落と社会 (I) ——集落・人口・家族を中心に」『大阪女子学園短期大学紀要』1976 : 121-143。

杉本 トレス海峡地域の集落と住居

- 1980 「パプア南西岸地帯における地域社会の諸相——マワタMawata村を中心として——」  
『愛媛大学教養部紀要』XIII: 133-183。
- MILES, D.  
1964 The Ngadju Longhouse. *Oceania* 35(1): 45-57.
- 大島襄二  
1978 「トレス海峡諸島の文化変容とその史的背景」『オーストラリア研究紀要』別冊4:  
185-207。追手門大学オーストラリア研究所。  
1980 「伝統文化とキリスト教——文化変容の地理学的研究——」『関西学院大学創立90周  
年記念文学部論文集』pp. 113-136。  
1982 「パプア南西岸パラマ島の人口変動と文化変容」『人文論究』31(3): 43-63。
- ROBEQUAIN, C.  
1966 *Malaya, Indonesia, Borneo and the Philippines*. London: Longmans.
- RON, E.  
1975 *Australian Traditional Bush Crafts*. Melbourne: Lansdowne Press.
- ROTH, W. E.  
1910 *North Queensland Ethnography*, Bulletin 16, Records of the Australian Museum, VIII.
- 佐々木高明  
1970 『熱帯の焼畑——その文化地理学的比較研究——』古今書院。
- 関根康正  
1979 「ロングハウスをめぐる空間構造——イバン族のばあい」『季刊人類学』10(2): 54-107。
- 杉本尚次  
1971 「東南アジアの住居——その分布を中心として——」『季刊人類学』2(3): 147-191。  
1977 「木曜島——トレス海峡諸島の地域中心」『地域文化』3: 1-19。  
1978 「ハモンド島の村落と住居」『国立民族学博物館研究報告』3(1): 95-113。  
1981 「パプア・ニューギニア, ダルー・コナの民家」『民俗建築』80: 54-58。
- SUMNER, R.  
1974a *Settlers and Habitat in Tropical Queensland*. Monograph Series 6, Dept. of Geography,  
James Cook University of North Queensland.  
1974b *Pioneer Homesteads of North Queensland, Lectures on North Queensland History*, James  
Cook University, pp. 47-61.
- 高山竜三  
1979 『ヒト・文化・文明——野外科学としての人類学入門』八千代出版, pp. 200-214。
- TISCHNER, H.  
1934 *Die Verbreitung der Hausformen in Ozeanien*. Studien zur Völkerkunde 7, Leipzig.  
Tokyo Institute of Technology, Dept. of Cultural Anthropology.  
1977 *Rural Communities in East Malaysia (Preliminary Report)*.
- WERTH, E.  
1954 *Grabstock Hacke und Pflung*. Ludwigsburg. (飯沼二郎, 藪内芳彦, 1968『農耕文化の  
起源』岩波書店。)
- WILLKIN, A. and HADDON, A. C.  
1912 Houses. In A. C. Haddon (ed.), *Reports of Cambridge Anthropological Expedition to  
Torres Straits*, Vol. IV, Cambridge; Cambridge University Press, pp. 93-119.